

- (2) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二四二頁。それ故に、我々は、世界における質の相違は、量の相違にもとづく・量の相違に基礎づけられてゐる、といふことかできる。
- (3) Hegel, System der Philosophie. I. S. 55. 「定有するすべてのものは質量をもつてゐる。定有するものはすべて大いさをもち、そしてこの大いさは或るもの自身の性質に屬する。……或るものはこの大いさに對して無頓着ではない。したがつて大いさが變化せしめられるならば、或るものは現にあるところのものにとゞまらないで、大いさの變化は或るものの質を變化させるであらう。……かくして、この定量を越えて増減されるとき、事物は崩壊するといふことが、事物の規定なのである。」(Hegel, Wissenschaft der Logik. I. S. 343.)
- (4) 永田廣志、『唯物辯證法講話』、一八八頁。
- (5) 永田廣志、『唯物史觀講話』、一〇七頁。
- (6) エンゲルス、『反デュイリング論』、二五〇頁。
- (7) レーニン『哲學ノート』、第三冊、二三七頁。「形而上學と反對に辯證法は、發展の過程を、量的變化が質的變化に導かないといふ如き單純な成長過程として考察せずに、目立たない隠れた量的變化から顯然たる變化、根本的變化、質的變化に移行するが如き發展として考察する。ここでは質的變化は漸次的にではなく急激に、突然に、一つの狀態から他の狀態への飛躍的移行の形で到來し、偶然にでなく、法則的に到來し、目に見えない漸次的な量的變化の蓄積の結果到來するのである。」(スターリン、『辯證法的唯物論

および史的唯物論について、六頁)。

(8) レーニン、同上、第三冊、三三四頁。

(9) ソヴェト大百科版、『辯證法的唯物論』、二二二頁。

しかし飛躍は決して「瞬間的な、本質においては時間を持たぬ、……新しい質の生誕」・「瞬間的のもの」・「新しきものの發生のあらゆる複雑性を失つたもの」ではない。そのやうに見る見解は「左翼」日和見主義の見解である。飛躍の過程は闘争にみちた複雑な過程である。たとへばレーニンはかう書いてゐる。「社會主義の先輩が「飛躍」と名づけたのは、世界歴史の變形といふ見地から眺めた危機を指すものであつて、かつこの種の「飛躍」は、十年もそれ以上にも亘る時期を包容するものである¹⁾。飛躍は「長い陣痛」である。「飛躍は深く矛盾に充ちた過程である。飛躍は舊い質の矛盾を解決すると共に、新しい、數倍も尖鋭化した形態で同じ闘争を續けることを意味する²⁾。」飛躍の過程において、新しいものが生れたばかりのときには、この新しいものは著しく力が弱く、ヨリ強力なる舊いものが根強く残つてゐる。すなはち一躍して新しいものが完成された姿で現れ出るのではなく、新しいものは生誕の第一歩においては發酵・不安定のなかにある。レーニンは『偉大なる創意』のなかに、「吾々はまた、或る社會制度の覆えされた跡には、或る時期の間は、舊制度の多くの痕跡の殘

第二章 量の質への並びにその逆の轉化の法則

るといふことをも知つてゐる。否な新しいものが生れた場合には、或る時期の間は、舊いものが、却つて新しいものよりか有力に残つてゐる。これは自然界におけるが如く、社會生活においても常にその通りである。しかしかして生れ出たばかりの新しいものはヨリ強力な舊いものとはけしく闘争する。しかしこの新しいものは、生誕の第一歩においては弱くとも、舊いものの止揚・一步前進として本質的には舊いものより強力であり、「質的な優越點」をもつてゐる。されば飛躍の過程において新しいものの舊いものに對する勝利・克服が前進する。飛躍は激烈な闘争による舊いものの克服の陣痛の過程である。この飛躍の陣痛の過程は幾つかの小段階を包藏してゐるといふことができる。レーニンは、革命の實踐に關聯して、この飛躍の包藏する内的段階を次のやうに特徴つけた。「大なる飛躍時代の眞の休戚は次の事柄に存してゐる。即ちおびたしい舊秩序の残存物は、新秩序の芽生え（それは何時でも、容易に目につかぬ）の分量よりも、往々にしてより迅速に堆積する。そこで發展の線、ないしは發展の鎖のうちで、どれが最も本質的なものであるかを見分けることが必要である。能ふ限り多くの残存物を破碎すること、即ち能ふ限り多くの舊制度を爆破することが、革命の成功のために最も重要な歴史的な時期がある。けれども爆破するだけはし盡して、残存物の斷片を拂ひのけるといふ「平凡な」……仕事は、當面の問題となる時期がある。また石ころが充分に取り除けられぬ地面の残存物の

破片の下から、頭をもたげる新しい芽生えを、注意深くいたはることが、最も大切な時期もある」と。實に「大飛躍」としての過渡期はそれ自身、いくたの過渡期を、いくたの轉換、段階から段階への飛躍を包藏する。……飛躍のなかに我々は闘争の各段階を區別し、飛躍そのものなかに我々は發展の中斷と連續との獨自的な相互滲透を見出す」のである。

- (1) レーニン、『ソヴェエツト政權の當面の任務』、レーニン著作集、第五卷、『ソヴェエツト政權』、一九二六年、一四五—一四六頁。
- (2) シロコフ・ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、三九七頁。
- (3) レーニン、『偉大なる創意』、レーニン著作集、第五卷、『ソヴェエツト政權』、一九二六年、二八八頁。
- (4) レーニン、『ソヴェエツト政權の當面の任務』、一四六—一四七頁。
- (5) シロコフ・ヤンコフスキー編輯、同上、四〇〇頁。

以上によつて明かなごとく、質に起動づけられた量の變化・量の漸次的なる發展は、或る限界にまでたちいたると、質の變化・質の飛躍的なる變化をよびおこす。すなはち「漸次的な量的變化の一定の蓄積は、飛躍的な質的變化を喚起する」¹⁾のである。このことは、「對象の量的變化が對象の質的方面に作用する」²⁾ことであり、對象の量的規定性が、對象の質的規定性に「影響を及ぼす」ことである。言

葉を換へていふならば、量の變化が質の變化に轉化すること・漸次性が飛躍性に轉化することである。すなはち「量が質に轉化する」ことである。量の變化によつてその或る限界點においてよびおこされる質の變化は、「量の質への轉化」・「量の質への移行」である。「量的變化は一定の點において質的變化を呼び起す、云ひかへれば、量は質に轉換し、移行する。」³⁾かくして、量の變化は質の變化の可能性をふくんでゐる・漸次的變化は飛躍的變化の可能性をふくんでゐる、といふことができる。「漸次的變化のうちには、初めから中斷飛躍の可能性が含まれて」ゐるのである。⁴⁾

- (1) 永田廣志、『唯物史觀講話』、一八六頁。
- (2) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二四一頁。
- (3) 永田廣志、『唯物史觀講話』、一〇六頁。
- (4) ミーチン監修、同上、二四四頁。

質的變化・飛躍的變化は、量の變化・漸次的變化によつてよびおこされる。それは量の變化なくしては不可能である。エンゲルスはかういつてゐる。「量から質への轉化の並びにその逆の法則。このことを吾々は吾々の目的に合すべく次のように言ひ表はすことが出来る、即ち自然においては、凡ゆる個々の場合に對して精密に確定できるやうに、質的變化はただ物質または運動(所謂エネルギー)の

量的増加若くは量的減少によつてのみ起こりうる。自然における一切の質的差別は、或は相異なる化學的組成に、或は運動(エネルギー)の相異なる量乃至形態に、或ひは、殆んど凡ての場合にそうなのだが、これら兩者に、基いてゐる。従つて物質の或は運動の増加並びに減少なくしては、言ひ換ふれば當該物體の量的變化なくしては、その質を變化することは不可能である¹⁾と。それ故に、質的變化は量的變化が準備するといふことができる。「量的變化(漸次的變化)は同時に新しい飛躍の準備、新しき質への移行の準備である²⁾」のである。「飛躍、一つの質の他の質への移行は、一度に準備されるのではなく、物の漸次的變化の過程において準備される³⁾」のである。

- (1) エンゲルス、『自然辯證法』、下卷、八二—八三頁。
- (2) シロコフ・ヤンコフスキ編纂、『唯物辯證法教科書』、四〇八頁。
- (3) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二四四頁。

我々はこゝで量の質への轉化・移行に關する實例をいくつかあけておかう。もちろん、世界に存在するすべてのものは變化するのであるから、何一つとして量の質への轉化をしないものはない。我々はたゞ量の質への轉化の理解を助けるために、いくつかの實例をこゝに示しておくにすぎない。

ヘーゲルは『大論理學』のなかにかう書いてゐる。「水は、その溫度を變化することによつて、單

に温くなつたり冷くなつたりするばかりでなく、固體の状態、液體的流動性の状態、および彈力的流動性の状態を通つて行く。これらの異つた状態は漸次的に起るのではない。まさに、温度の變化の單に漸次的なる進行は、これらの點によつて突然に中斷され阻止される。しかして他の状態の出現は飛躍である。……水は、冷却によつて、ドロドロとなりそして徐々に氷の固さにまで固まるといふふう

に漸次的に固くなるのではなくて、突然に固いのである。水が静止してゐる場合には、氷點の全温度をもつてしても水はその全き流動性をなほ持つことができるが、ちよつとの揺り動かしがその水を固體の状態にもたらすのである。エンゲルスも『反デューリング論』のなかでいふ。「通常の氣壓の下では攝氏零度で液體から固體になり、攝氏百度で液體から氣體になる、それ故、この二個の轉向點に於ては、氣温の單なる量的の變化が水の質的の變化を惹起するのである。」²⁾

エンゲルスが『自然辯證法』のなかを書いてゐることから引用しよう。「吾々が任意の無機物體を一層微細な部分に分割して行く場合を考へるとき、最初のうちはなんらの質的變化も現はれて來ない。だがしかしこれにはその限界が存する。即ち、蒸發の際におけるように個々の分子を分離し得る以上、更にそれらの分子の大部分は、これをなほ一層分割することができるとはいへ、この場合必ず質の完全な變化を受けなければならぬ。分子がその個々の原子に分解されると、これらの原子は前

の分子とは全然異つた性質を有つものである。相異なる化學的諸元素から成る分子においては、この合成分子が分解すると、それら諸元素自體の原子若くは分子が出てくる。また單體の分子においては、全然異なる質的諸作用を有する遊離原子が出てくる。……したがつて吾々は、分割といふ純粹に量的な操作には一定の限界があつて、この量的操作もかゝる限界を越えるときは一つの質的差別に轉化することを知る。即ち物體は全く分子からのみ成つてゐるが、それは分子とは本質的に異つたものである。宛かも分子が原子と本質的に異つてゐるやうに、天體並びに地上の物體に關する科學としての力學と分子の力學としての物理學及び原子の物理學としての化學との區分は將にかゝる相違に基くものである。」³⁾

「量的組成の變化することによつて生ずる物體の質的變化に關する科學」・「ヘーゲルの發見した自然法則（量の質への並びにその逆の轉化の法則）が最も高らかに凱歌を擧げたところの領域」たる化學からエンゲルスの例示してゐるものの一部をこゝに引用するならば――

「酸素の場合を例にとらう――通常の一箇の原子の代りに三箇の原子が結合して一箇の分子となる場合、吾々はその嗅氣と作用との點で通常の一箇の酸素とは極めて明確に異るところの一物體、即ちオゾンを得る。更にまた、酸素が窒素若くは硫黃と化合する種々な比例を考へて見やう。この場合比例の

異なるに従つて、その各々に應じて他の一切のものと質的に異つた物體が生ずる！ 笑氣（一酸化窒素 N_2O ）と無水硝酸（五酸化窒素 N_2O_5 ）とはなんと相異つてゐることだらう。前者は氣體であり、後者は常溫の下では結晶せる固體である。然しながら（兩者の）組成上の全差異は、後者が前者の五倍に當る酸素を含んでゐるといふ差異にすぎない、そしてこの兩者の間には尙ほ三箇の他の窒素酸化物（ NO 、 N_2O_3 、 N_2O_4 ）が存在してをり、それらは凡て上記の兩者からも、また各相互間においても、質的に相異るところのものである。このことは、炭素化合物の同族列、特に簡単な炭化水素の場合において、なほ一層顯著に現はれてゐる。……しかし、ヘーゲルの法則（量の質への並びにその逆の轉化の法則）はたゞに化合せる物體に妥當する許りでなく、また化學的諸元素夫者にも妥當する。吾々は今日「諸元素の化學的諸性質は原子量の週期的函數であること」……従つて元素の質はその原子量の量によつて決定されるといふことを知つてゐる。そしてこれの證明は見事に爲されてゐる。メンデレーエフは原子量に従つて配列された同族元素列の中には種々の間隙が存してをり、これらの間隙はこゝに未だ新しい諸元素が発見されねばならないことを示すものである、といふことを證明した。……メンデレーエフの豫言は極めて微細な諸點に至る迄適中してゐた。……ヘーゲルの量から質への轉化の法則の——無意識的にせよ——適用によつて、メンデレーエフは一つの科學的業績を爲し遂げた、この業

蹟たるやかのルヴリエが未だ知られてゐない遊星である・海王星の軌道の計算において爲した業績と敢て同視することを許すものである。⁴⁾

終りに、ヘーゲルが、精神の發展の理論としての觀念辯證法の見地においてではあるが、量から質への移行を次のやうな絢爛たる言葉で語つてゐる一節を、『精神現象論』から引用しよう。「なるほど精神は決して靜止のなかにあるのではなくて、不斷の前進運動を續けてゐる。しかし小兒の場合に、長い靜かな榮養の後に、最初の呼吸が單なる増大的進行のかの漸次性を中斷し——質的飛躍だ——、今や小兒が生れ出たのと同様に、自己を形成する精神は徐々に且つ靜かた新しい形態をめざして成熟し、自己のこれまでの世界といふ建物の小部分を解體するのであつて、この世界の揺らぎはたゞさゝやかな徴候によつて暗示されるにすぎない。現存するものの中に根をはつてゐるところの浮薄と倦怠、未知のものに對する漠然たる豫感、何か他のものが近づきつゝあることの前兆である。全體の相貌を變化させなかつたところのかゝる漸次的な瓦解は、電光石火一擧にして新しい世界の建築を生み出すところの日出によつて中斷される。⁵⁾

(1) Hegel, Wissenschaft der Logik. I. S. 382—383. 「たとへば水の溫度は初めにはその液體的流動性への關係において無關心である。しかし後にはかゝる液狀の水の溫度の増減において、かゝる凝集状態が質

的に變化し水が一方においては蒸氣に他方においては氷に變化せしめられる一點か生ずる。」(Hegel, System der Philosophie. I. S. 255)。

(2) エンゲルス、『反デュリング論』、三〇四頁。量の質への並びにその逆の轉化の法則の例證として使用されるところのかゝる「水の沸騰現象(又は氣化現象)および氷の融解現象」に對する「自然科學的見地からの檢討」および「原子分子結合論の見地からの檢討」については、原光雄、『自然辯證法の研究』、四一―二頁、一九―二二頁、參照。

(3) エンゲルス、『自然辯證法』、下卷、八四―八五頁。

(4) エンゲルス、同上、八六―八九頁。「量から質への轉化。最も單純な例、酸素とオゾン。ここでは酸素原子數二對三の相異が臭氣に至るまで全然別な性質を生ぜしめる。他の同素體も同様に、分子中の種々異なる數の原子に依つてのみ化學から説明される。」(エンゲルス、同上、七六頁。)實際の現實において酸素からオゾンへの移行がどんなふうに行はれるかについては、原光雄、同上、一六一―一八頁、參照。

(5) Hegel, Phänomenologie des Geistes. Herausg. von Hermann Glockner. Stuttgart 1927. S. 18.

Ⅵ 質の飛躍的轉化によつて新しい質が形成されると、この新しい質は舊い質のもとにおける量の發展を繼承し、この量の發展を更に前進せしめる。舊い質によつて中斷され阻止された量の發展は、

新しく形成された質によつて、この新しい質のもとで、再び躍進を開始する。「新しい質は新しい量を創造」するのである¹⁾。量の發展は舊い質と新しい質との間の飛躍點において中斷されるとはさへ、舊い質のもとにおける量の發展と新しい質のもとにおける量の發展とは一つの連續・漸次的連續である。それ故に、舊きものから新しきものへの變化は、比喩的な言ひかたではあるが、量の漸次的連續的發展が舊い質を押しやぶり・舊い質の枠を破碎し、新しい質のなかへくゞりこむこと・新しい質の枠のなかへ進み入ることである、といふことができよう。しかしとにかく新しい量の發展は新しく形成された質のもとにおいてはじめて可能となる。されば、舊い質の死滅・新しい質の形成は、新しい量的發展の可能性の形成である。「舊き質の死滅を通じていまや新しい量的前進の可能性が達せられる²⁾」のである。すなはち「新しいものの發生、云ひかへれば質的變化は、以前とは異つた量的變化の出發點となる³⁾」のである。このことからして、また、發生した新しい質は、舊い質に照應する定量とは異つた、それ自身に固有の定量——或る大いさから或る大いさまでの——を有することになる。「發生した新しい質には、それに固有な量的規定が具備される⁴⁾」のである。質の飛躍的變化は、以上によつて明かなごとく、直ちに量の新しい漸次的變化をよびおこすのであるから、質の變化は量の變化へ移行し・飛躍性は漸次性へ移行し・質は量に轉化するわけである。舊い質の飛躍的止揚による新

しい質の形成・そしてそのことによつてよびおこされる量の新しい發展は、「質の量への轉化」にほかならない。すなはち「同時に、この移行（「或る質の他の質への移行」）は質の量への移行である。⁵⁾」この質の量への轉化は、對象の質的變化が對象の量的方面に作用すること・對象の質的規定性が對象の量的規定性に作用することである。

- (1) シロコフ・ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、四〇五頁。
- (2) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二四一頁。
- (3) 永田廣志、『唯物辯證法講話』、一八八頁。
- (4) 永田廣志、同上、一八八頁。
- (5) ミーチン監修、同上、二四一頁。

量の中斷・質の飛躍のその一點において、量の變化は質の變化をよびおこし、同時にまたこの質の變化は量の變化をよびおこす。すなはちこの一點において、量は質に移行し、同時にまたその逆に質は量に移行する。すなはち質と量とは交互に移行し合ふ。かくして質と量とは辯證法的交互作用にあるといふことができる。「質と量との關係は——とエンゲルスは『自然辯證法』のなかにいふ——相互的關係である……、即ち量が質に變化すると同様に質も亦量に轉化する……、まさしく交互作用が起る

のである……¹⁾」質と量とのこのやうな辯證法的交互作用は、量の變化が質の變化をよびおこし同時に逆に質の變化が量の變化をよびおこすことであるから、「質の變化は量の變化と不可分な交互關係にある²⁾」といふふうにいふこともできる。とにかく、量の質への轉化は同時に質の量への轉化であつて、この二つの轉化は反對の方向の移行・それ故に區別されたものでありながら、また同一物である。量と質との辯證法的統一の生命・眞髓がこゝに集中的にあらはれる。「量の質への移行及びその逆は質量の内的矛盾の開示に他ならない³⁾」のである。このやうな質と量との交互作用・質と量との辯證法的統一は、辯證法的唯物論において、「量の質への並びにその逆の轉化の法則」として定式づけられたのである⁴⁾。しかしてこの法則は「あらゆる實踐的活動において莫大な役割を演ずる。」人間の意識的・合目的實踐は個々の場合におけるこの法則の具體的なる把握に立脚せねばならない。「何事かを爲すためには前以つてその可能性の限度を知らなければならぬ。そのためには、質と量の辯證法的統一、交互作用、度量（質量）の正しい把握が缺くべからざるものである⁵⁾」。

- (1) エンゲルス、『自然辯證法』、上巻、二二六頁。「量の質への轉換と、その逆の、質の量への轉換とは、つねに交互作用的である。それは質と量の交互作用に基くものである。」（永田廣志、『唯物辯證法講話』、一八八頁）。この交互作用においては量の契機が基礎的、主導的である。

- (2) 永田廣志、同上、一八六頁。
- (3) シロコフ・ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、四二八頁。
- (4) 「質と量のこの交互關係は、唯物辯證法において、量の質への轉換（又は轉移、移行、Unschlagung、Übergehen）およびその逆の法則の中に定式づけられてゐる。」（永田廣志、同上、一八六頁）。
- (5) 永田廣志、同上、一八八頁。

變化・發展とは、量から量への發展、質から質への發展であるばかりでなくて、右に明かにしたごとく量から質への發展および質から量への發展である。ヘーゲルはいふ。「有の變化は一般に一の大きさから他の大きさへの移行であるばかりでなく、質的なものから量的なものへ並にその逆の移行、すなはち漸次的なものの中斷であり先行の定在に對する質的他者であるやうな、他者となること（Anderswerden）である¹⁾。質量の立場は、質的變化と量的變化との交互關係・質と量との辯證法的交互作用を具體的に把握する立場である。ヘーゲルの『論理學』にあつては、「質の段階において變化は單に質的な面からのみ考察された。量においては變化は單なる増減にすぎなかつた。質量においてはじめて、量的變化と質的變化との必然的聯繫が確立される。」質量の立場は「單なる質、單なる量といふやうな抽象の立場からは看過されるより包括的な法則を見出すのである²⁾」

(1) Hegel, Wissenschaft der Logik. I. S. 383.

(2) 松村一人、『ヘーゲル論理學研究』、二九六頁。

世界に存在する事物と事物・質量と質量とは、その生成の關係においては、漸次性をもつてつながり合ひ、同時に飛躍をもつてつながり合ふ。或る事物と他の事物との聯結・或る質量と他の質量との聯結は、量的・漸次的聯結と質的・飛躍的聯結との二重性である。これこそは「聯結の辯證法的性質」であり「實在的聯結」の内實である。我々はこれを「人爲的に捻造された聯結」・「頭の中で捻出された聯結」・「觀念的、空想的聯結」をもつておきかへてはならない。エンゲルスは、「常に問題の主眼は、事物の聯結を頭腦の中で案出することではなくして、事實の中にこれを發見することである」と『フォイエエルバツハ論』のなかに書いてゐる¹⁾。世界は、實にかゝる實在的な漸次的且つ飛躍的聯結をもつて結ばれ合ふ無數の質量と質量との關係である²⁾。ところでこの質量と質量との聯結は一定の質のもとではじめ増加する速度をもつて變化しつつあつた量が徐々にその速度を減少し或るところまでゆくとその量の變化が中斷・停滯しそしてこの量の變化の中斷・停滯した點においてその質の急激なる變化が起りこのやうに質が變化すると中斷・停滯してゐる量がこの新しい質によつて再び變化をはじめこの量の變化にまた速度が加つてゆくとといふ形をとつてゐる。これは振動體がその運動

の過程において一定の間隔において運動の全く存しないか或ひは極小であるやうな點(結節點)を形成しこの結節點において再び新しい一つの振動の運動がよびおこされるに似てゐる。かくして質量から質量への轉化・質量と質量との聯結の系列は、このやうな結節點の系列すなはち「結節線」として思ひ浮べることができる³⁾。されば世界における變化・發展の總體は、ヘーゲルの言葉をかゝるならば、「質量關係の結節線」(Knotenlinie von Massverhältnissen)⁴⁾としてあらはれるといふことができる。ヘーゲルはかう書いてゐる。「質量のなかに存在する量が一定の限界を越えようと、この量に相應する質もまたこのことによつて止揚される。けれどもこれをもつて質一般が否定されるのではなくて、たゞこの特定の質が否定されるにすぎないのであつて、この特定の質の場所は直ちに他の質によつて占められるのである。このやうに代る代る量の單なる變化次にまた量の質への變化としてあらはれるやうな、質量の過程は、結節線の形として直觀にもたらしうことができる⁵⁾。」レーニンは『哲學ノート』に「質量關係の結節線」——量の質への移行……、漸次性と飛躍。漸次性は飛躍なしには何ものをも説明しない……⁶⁾と。しかし「ここ(質量關係の結節線)でヘーゲルが考へてゐるのは、質的には同じ構成要素が量的に異つた割合をもつて結合することによつて生ずる質的相違である。……このやうな現象は化學において典型的に見出される……⁷⁾。化學的結合(「化合」)においては——とヘーゲルは書いて

てゐる——混合の比率が累進的に變化する場合には、二つの物質が混合の目盛の特別の諸點において、特殊な質を示す諸化合物を造るといふやうな質的諸結節および諸飛躍が現はれる。……たとへば酸素と窒素との諸化合はいろいろ異つた酸化窒素および硝酸を與へるが、これらはたゞ混合の一定の量的比率においてのみ現はれ、そして本質的に異つた質をもつてゐる。したがつて中間によつたはる混合比率においては特殊な實有をもつ諸化合は生じない⁸⁾。「しかし注意すべきことは、ここ(質量關係の結節線)での質量における量的側面とは構成要素の割合であるといふことであり、しかもヘーゲルがここから導き出す質量の結節線は廣く量一般について言へるといふことである。それは本來「特殊の定量」においても言へることなのである。勿論そこでは主として一個の質量内における質と量との關係が考へられたといふことは事實であるが、しかしこのことは質量の結節線が割合でなく單なる定量についても生ずるといふことは否定することができない。ヘーゲルもまた結節線についての例をあけるにあつて水の凝集状態と温度の例をもあけてゐるのである。すなはち結節線は割合についてのみでなく廣く量一般について考へられてゐるのである⁹⁾。」かくしてヘーゲルの質量關係の結節線は質量轉化の普遍的法則の一般的表現となすことができる。「質量は量と質との關聯の法則である。質量の結節線は一聯の量的變化と質的變化との更らに一層廣汎且つ一般的な法則である¹⁰⁾。」

- (1) エンゲルス、『フォイエルバッハ論』、九一九頁。
- (2) 「(1) 聯結、……(2) 或るもの他のものへの移行、……(3) 對立の同一性——これがヘーゲルにとって肝心な點である。」(レーニン『哲學ノート』、第一冊、一七五—一七七頁)。「事物そのものはその關係と發展とにおいて考察されねばならぬ。」(同上、第一冊、二五七頁)。
- (3) 「松村(結節點)というのは、或る程度まで量的な増減がおきて、質の變るその點、それをヘーゲルは結節點とよんでいるが、本來ヘーゲルが何からこの概念をとつてきたかといふことはつきり知りません。(伊豆) 原語は何ですか。(松村) クノーテン・プンクト (Knotenpunkt) 節點です。振動の場合に山と谷が出来ますね。そこから次に移る。あれが用いられているのかもしれませんが。(古在) 結び目ですね。(松村) また天文学の概念だとクノー・フィッシャーはいつています。結局内容からいえば、量的な増減が一定の段階に達して、新しい質的な變化か起るようになる、その點、これをヘーゲルは結節點とよんでいるのです。」(古在由重、松村一人、伊豆公夫、『スターリン「辯證法的唯物論と史的唯物論」研究(一)』二五—二六頁)。「物理學に於ては、或る振動體は一定の間隔をおいた點(節點)即ち節線を形成する。そしてこの點においては、振動は全く存しないか、極小であるとせられる。度量關係は、それぞれの排他的な選擇的親和力に基いて、それぞれ質的に變化せられた結果、即ち中和を生ずる。そしてこの「節」即ち結節はそれぞれの度量關係の一列として現われるから、これを「度量關係における節線」という。」(武市健人、『ヘーゲル論理學の世界』、上卷、五三一—五三二頁)。

(4) Hegel, Wissenschaft der Logik. I. S. 379. 發展は、特定の質量からこれと異つた特定の質量への發展である。たとへば質量甲がその量と質との辯證法によつてヨリ高度の質量乙に轉化したとするならば、質量甲と質量乙とは量的に且つ質的に異なるものであるが故に、甲と乙とは、それぞれの特定の質と量との統一において具體的に別個のものとして、取扱はれねばならない。それ故に高度の質量乙を低度の質量甲に還元して取扱ふ機械論的還元論は根本的に誤謬である。たとへば生物學や化學を力學に還元することがこときは大きいなる誤謬である。エンゲルスは運動のヨリ高い形式のヨリ低い形式への還元の可能性を設置した。……エンゲルスは質と量との法則の辯證法的理解から出發して、生物學および化學を力學に還元することの原則的可能性を設置した。(クーチエロフ、『レーニンとプレハノフの認識論』、二五六—二五七頁)。エンゲルスはいふ。「かのデカルトによつて動物が一個の機械であつたやうに、十八世紀の唯物論者にとつては人間は一個の機械であつた。化學的有機的性質のものであり、機械的法則があてはまらないといふ譯ではないが、さうした機械的法則は、もつと高級な他の法則のために背後に押し退けられてゐるやうな自然事象を律するに、かくのごとく専ら機械的尺度を以てしたのは、或る特殊な、しかし時代から考へれば又止むを得ない古典佛蘭西唯物論の偏狹性の生じた所以であつた。」(『フォイエルバッハ論』、八九二—八九三頁)。

(5) Hegel, System der Philosophie. I. S. 257-258. 結節線が結節點と同じ意味に使用される事がある。「このやうな量的變化の一定點において生じる質的變化をヘーゲルは「節度」[質量]關係の結節線」(Knotenlinie) 第二章 量の質への並びにその逆の轉化の法則

von Massverhältnissen) と名づけてゐる。」(松村一人、『ヘーゲル節度 (Mass) 論について』、六八頁)。「量的變化のある點に於ては突然質的の變化が生ずると云ふヘーゲルの質量關係の結節線」云々。(エンゲルス、『反デューリング論』、三〇四頁)。なほ、質量關係の結節線の把握は世界の内在的聯關の把握に導く。「認識は自然のうちに、各種の、そして外見上は互に關聯しない事物及び現象の多様性を見出す。質量の結節線の發見はそれらの内的聯關の摘發を、多様性の統一の摘發を、自然のそれぞれ種々な領域の統一の具體的、全一的反映を導き出す。」(シロコフ・ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、四三一頁)。「質量の結節線は自然及び社會のあらゆる領域における發展の全一的聯關の認識への道を明らかにする。」(同上、四三三頁)。(6) 第一冊、七五―七七頁。

(7) 松村一人、『ヘーゲル論理學研究』、三三二頁。

(8) Hegel, Wissenschaft der Logik. I. S. 382.

(9) 松村一人、同上、三三三頁。(10) シロコフ・ヤンコフスキー編輯、同上、四三一頁。ノ

舊い質との統一にある量の大きさ・したがつて舊い質によつて規定され且つ逆に舊い質を基礎づけるところの量の大きさと、新しい質との統一にある量の大きさ・したがつて新しい質によつて規定され且つ逆に新しい質を基礎づけるところの量の大きさは、異つてゐる。おのおのの事物はそれぞれ特有の質と特有の量との辯證法的統一・特定の質量であるとともに、漸次性と飛躍との二重性によつ

て相互に限りなく聯結し合ふ。量の漸次的發展は質の飛躍的發展をよびおこし、新しく形成された質は新しい量の發展をよびおこし、この新しい量の發展は更に新しい質への轉化をおびおこし、かくして發展は無限につづく。質と量との辯證法的統一の運動は、無限の運動・「無限に低きより高きへ進む永劫不斷の過程」である。エンゲルスは『フォイエルバッハ論』のなかで辯證法的運動の無限性を社會の歴史的發展に關して次のやうに書いてゐる。「次から次へと生滅する歴史上の諸状態は、すべて低級のものから高級のものへと進む人類社會の無限の發展道程に於て、一時的な段階にすぎない。どの段階もみな必然のものであり、それ故にまた、その段階を發生せしめた時代と、その諸條件に對して存在權を持つてゐる。けれどもそれは老衰して行く。そしてその、段階自體の胎内で徐々に育まれるより新しくより高い諸條件に對してもはや存在權を持たなくなるのである、即ちそれは自分より一段高い段階に地歩を譲らねばならず、かくしてあらはれた新段階もまた、今度は自分の順番で衰滅と没落の列に入る。」¹⁾ 實に辯證法的運動は量から質への・質から量への轉化の無限の運動である。

1) エンゲルス、『フォイエルバッハ論』、八八一頁。「物質は永久に循環をなして運動する。……この循環、その裡においては物質の凡ゆる有限的な存在様式も——それが太陽又は星雲、個々の動物又は動物の種屬、化學的化合物又は分解物なると否とを問はず——均しく暫定的なものであり、且つ此處においては、

永久に變化し、永久に運動する物質と、それに従つて物質が運動し變化するところの・諸法則との外には永久的なものとは何一つも存在しない。」(エンゲルス、『自然辯證法』、下巻、三〇頁)。

Ⅷ 世界に存在するすべてのものは量と質との辯證法的統一物・質量であり、その變化は、量の質への並びにその逆の、質の量への轉化である。それ故に事物の變化・質量の變化は、また、量における變化と質における變化との辯證法的統一・量の漸次的變化と質の飛躍的變化との二重性・漸次性と飛躍との統一である。ヘーゲルは『大論理學』のなかにかう書いてゐる。「變化とは、同時に(定量の變化であると同時に)、本質上、或る質から他の質への移行……である。」「質の進行が量の不斷の連續性のなかにある限り、質的變化の點に近づきつつある諸關係は、量的に見れば、たゞ増減によつて區別されてゐるにすぎない。この側面からすれば變化は漸次的變化である。しかし漸次性は變化の外的なるものに關すること、變化の質的なるものに關することではない。後續の量的關係に無限に近づいてゐるところの先行の量的關係は、いまだ別の質的定有である。それ故に質的側面からすれば、漸次性の單に量的なる進行——それ自身には何らの限界も存しないところの——は絶對的に中斷される。新しく現はれる質は、その單に量的なる點からすれば、消滅する質に對して無規定的に他の質

であるから、移行は飛躍である。二つの質は全く外的な質として相對して指定される。¹⁾ 變化・發展

・運動は漸次性と飛躍との對立物の統一・辯證法的統一なのである。²⁾

(1) Hegel, Wissenschaft der Logik. I. S. 345, S. 380-381.

(2) 「運動は連續性……と中斷性……との統一である。」(レーニン『哲學ノート』、第二冊、一九一頁)。

世界に實在する變化は單なる漸次的變化・單なる徐々たる變化ではない。萬物はたゞ徐々に變化する・たゞ漸次的に變化する・萬物は飛躍しない(自然は飛躍しない *Natura non facit saltum. SE gibt keinen Sprung in der Natur.*) と見る漸次的發展觀・「絶對的漸進性の見地」・「進化主義」・「俗流進化論」は、發展をたゞ量の側面においてのみ、従つて發展をたゞ一面的にとらへてゐるにすぎない。それ故に漸次的發展觀・「純然たる量的漸次性の見地」は、世界に實在する變化をたゞ一面的に反映する不十分なる發展觀(「偏跛なる發展觀」)・したがつてそれをありのままに反映せざる一つの誤れる發展觀である。それはまさしく(レーニンの言葉をかゝるならば)「量の抽象的規定に對して注意を一面的に向けること」、すなはち、全面的な變化および具體的な質等を顧慮することなしに、¹⁾である。ヘーゲルはかう書いてゐる「漸次性は、たゞ減少或ひは増加にすぎず、量への一面的

固執である。「人は好んで移行の漸次性によつて變化を理解しようとする。しかしむしろ漸次性はまさしく單に無關心な變化・質的な變化の反對物である。漸次性においてはむしろ二つの實在……の關係は止揚されてゐる。どちらも他方の限界ではなくて一方が他方に對してたゞ外的であるということが措定されてゐる。そしてこのことによつて……まさに理解に必要なことから……が遠ざけられるのである²⁾」と。漸次的發展觀は、量的變化のみを認め、發展を單なる増減に還元し、質的に新しい事物の發生・飛躍を否認するものであり、結局において、物をその一定の物にとどまると見る見地。「物の無變化の見地」に歸着する。「諸現象の量的な連續的變化だけでは、決して新しい現象の發生をきたさない。連續的變化のみを認めることは、世界における新しい現象の發生の可能性を否定することになる。……これは、物が一旦發生するや、その物は不變なる循環を描いて運動するといふ、物の無變化の見地に立つことである。」³⁾「本質においてかやうな「發展理論」は實際上的發展の明らかな否定である。」⁴⁾「言葉の上での發展の承認、實際において事實的發展の否定」である。漸次的發展觀は、結局「事物の不變性を認めること」・したがつて形而上學的世界觀の枠内にあるもの・反辯證法的⁵⁾形而上學的發展觀・前述のレーニンのいはゆる「第一の運動觀」である。このやうな發展觀は機械論者たちの反動的見解である。⁵⁾機械論者たちは、質の客觀性を否定し、運動の質的特性を否定して運動を單な

る量的機械的運動と見るが故に、その必然的結果として諸事物の飛躍的發展の否定・發展の單なる量的増減への還元におちこまざるを得ない。すなはち、「機械論は……發展を増減に還元し、飛躍を否定する⁶⁾」のである。このやうな機械論者たちの俗流進化論・漸次的發展觀は、ブルジョア反動的理論的武器となつてゐるばかりでなく、また小ブルジョア的な「右翼日和見主義的理論的方法論的前提(哲學的基礎)」・現存社會秩序の維持の階級利益につらなるところの改良主義・修正主義・社會ファッシズムの理論的基礎となつてゐる。⁷⁾我々はかゝる機械論的進化主義・漸次的發展觀に對して徹底的に闘争しなければならぬ。しかしそれは發展における量の漸次性の契機を一面的に誇張して絶對化することに對する反對であるべきであつて、發展における量の漸次性の契機の抹殺・否定であるべきではない。かゝる抹殺・否定は却つてその反對の誤謬へ・次に述べるごとき、發展における質の飛躍性の契機を絶對化する誤謬へ導くことになる。⁸⁾

(1) レーニン『哲學ノート』、第一冊、七三頁。

(2) Hegel, Wissenschaft des Logik. I. S. 345, 381.

(3) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二四四頁。

(4) シロコフ・ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、三八六頁、三八七頁。「質的變化を量的變化

に還元する機械論の見解は、當然の結果として、一切のものの発展における飛躍を否定することになる。」(永田廣志、『唯物史観講話』、一〇七頁)。

(5) 「機械論は……漸進主義理論の諸形態の一つ、あらゆる變化を單なる増大及び減少に還元するところの發展理論とレーニンによつて特徴づけられたものゝ一つでしかない。」(シロコフ・ヤンコフスキー編輯、同上、四一二頁)。

(6) ソヴェト大百科版、『辯證法的唯物論』、二二四頁。「機械論者はあらゆる運動形態の質的固有性を否定し、それを機械的運動に還元して、周圍の現實性のありとあらゆる現象を後者によつて説明する。質が客觀的性質を有してゐることを理解しないことは、現實性の諸現象の歴史的な、しかも飛躍的な發展の否定を伴つてゐる。」(同上、二二三頁)。なほ、「機械論においては質が無視される……。しかし質の無視は、客觀世界の質的多様を主觀の知覺装置に依存する假象となす主觀的觀念論、不可知論に成長する。」(永田廣志、『唯物辯證法講話』、一八五頁)。

(7) 「形而上學とその部分的な一種たる進化主義……は科學及び實踐におけるブルジョアの反動的方法論的基礎としてたちあらはれる。」「本質的に云つてブルジョアの機械論は現在、科學においても、直接政治的實踐においてもブルジョアの反動の武器である。」(シロコフ・ヤンコフスキー編輯、同上、三八六頁、四一四頁)。「根本的には機械論的方法論は右翼的日和見主義の理論的土臺である。」(ハエム・ミーチン、『哲學的論争の總決算について』、『マルクス主義の旗の下に』、No. 5、一一七頁)。「俗流進化主義と呼

ばれる見解は機械論を一層徹底させて、一切の飛躍、不連續を否定する。それは、自然は飛躍しない、といふ舊い形而上學の主張をくり返してゐる。改良主義、社會ファシズムは、俗流的進化主義を固執する。ベルンシュタインやカント派社會主義が強調したものは連續の原理であつた。彼等は、近代社會は無限の連續的、漸次的、運動の結果他の社會形態に到達すると主張し、近代社會秩序の存在を無限の未來にまで引きのばした。」(永田廣志、同上、一八九頁)。

(8) 「發展の辯證法的理解のための非妥協的な闘争、進化主義(言葉の上での發展の承認、實際において事實の發展の否定)の偽善振りの容赦なき暴露は我が哲學戦線の現實的な政治的任務である。」「我々は進化主義に反對する、併し我々は進化的な漸進的變化が發展において大なる役割を演ずることを否定するのでは決してない。……舊い質の域内における豫備的な量的變化がなければ飛躍は不可能である。」(シロコフ・ヤンコフスキー編輯、同上、三八七頁)。

ところで、世界に實在する變化は、同様にまた、單なる飛躍的變化でもない。萬物は飛躍的にのみ變化すると見るところの飛躍的發展觀・「飛躍主義」は、發展をたゞ質の側面においてのみ、したがつて發展を同様にたゞ一面的にとらへてゐるにすぎない。飛躍的發展觀も、漸次的發展觀と同様に、世界に實在する變化をたゞ一面的に反映する不十分なる發展觀(偏跛なる發展觀)・したがつてそれを正しく反映せざる一つの誤れる發展觀である。(たとへば地質學におけるキューヴィエーの大變革

説・生物進化に關するドフリースの突然變異説、等々。質的發展・質の飛躍的變化のみを認めるとき、質的に異なるもの間の内的聯結が見失はれる。「それに應じた量的變化なしに、質的轉化のみを認めることは、諸現象の變化の相異なる部面の中の歴史的聯結を失くすことである。」¹⁾「質的發展だけでは、一般的な歴史的過程の相異なる局面の間に歴史的聯結が缺けてゐることを意味する。」²⁾このやうにして一つの質と他の質との聯結が見失はれると、それぞれの質が絶對的に獨立せる質・全く孤立せる質・はじめから完成せる状態で存在する絶對的靜止物としてあらはれる。かくして存在する事物を完成せる絶對的靜止物としてとらへる一つの形而上學的理論に導かれる。飛躍的發展觀もまた結局發展の否定・發展の除外に終るのである。飛躍的發展觀は小ブルジョア的な「左翼日和見主義的理論の方法論的基礎」であり、したがつて反動的である。「極端な「極左」的代表者達は豫備的準備なく直ちに跳び越えて了はうとする。「悲惨の側面から半狂氣になつた小ブルジョア」の心理を表現するこれらの政策は新しきものと舊きものとの絶對的分離のみを飛躍のうちに見、新しきもの及び飛躍の漸進的準備に機械的に反對する。飛躍の斯やうな理解は全く觀念論的理解であり、あらゆる觀念論の如くに、それは眞直ぐに坊主主義に至る。長い活動を餘計であると云ひ、時には有害であると云つて、飛躍準備を否定する小ブルジョアのガチャガチャ連のこの理論は本質において進化主義理論と同様に反動的である。

る。トロツキズムが己れの反革命の本質を被ひかくすためにこの種の「極左」的言辯をろうしてゐるのは理由なくはないのだ。³⁾辯證法的唯物論はかくのごとき反動的なる飛躍的發展觀を斷乎排撃する。

- (1) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二四四頁。
- (2) ソヴェト大百科版、『辯證法的唯物論』、二二二頁。
- (3) シロコフ・ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、三八七頁。

漸次的發展觀と飛躍的發展觀とは「形而上學の二つの形態」・現存社會秩序維持の階級利益につながる反動的なる二つの反辯證法的¹⁾形而上學的發展觀である。「これら二つの潮流は、共に別々の端から出發して眞的發展を否定する。……これら二つの潮流は坊主主義に向ふ道である。」¹⁾ヘーゲルはいふ。「思辨的内容(辯證法的内容・運動)に加へられる最も普通の不正は、この思辨的内容を一面的とする事(我々の今の場合についていへば漸次性の契機のみを取出すこと或ひは飛躍の契機のみを取出すこと)、すなはちこの思辨的内容が融け込まれ得るところの諸問題(我々の今の場合についていへば變化は漸次的である・また變化は飛躍的である・といふ命題)の一つのみをかゝり出すことである。この場合、この命題が主張されるといふことは、否定され得ないが、この主張は正しい、とともにまた、この主張は正しくない。何となれば、いやしくも思辨的なものから一つの命題が取出

されるならば、少くとも同様に他の命題もまた注目され且つ主張されねばならぬからである。²⁾

(1) シロコフ・ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、四一八頁。

(2) Hegel, Wissenschaft der Logik. I. S. 76-77.

辯證法的發展觀(唯物論的)は、これに對して、世界に實在する變化をありのままに正しく、したがつて量的變化と質的變化との統一において、漸次性と飛躍との統一において、把握する。プロレタリア的發展觀・辯證法的發展觀によれば、世界に存在するすべてのものは漸次的に變化するとともに飛躍的に變化する。すなはち變化は量の漸次的變化と質の飛躍的變化との辯證法的統一である。しかし量的變化と質的變化との統一を正しく把握するプロレタリアートの辯證法的發展觀のみが、反動ブルジョアジーの且つ右翼日和見主義の漸次的發展觀と左翼日和見主義の飛躍的發展觀とを眞に克服することができ、したがつて二つの戦線における政治的闘争の理論的武器ともなることができる。「量の質への移行化の法則の正しい理解は二戦線における政治闘争の最も重要な方法論的基礎の一つである。¹⁾」しかし辯證法的唯物論的發展觀は、決して、右翼日和見主義の漸次的發展觀と左翼日和見主義の飛躍的發展觀との——デボーリン派のメンシェヴィキ化しつゝある觀念論におけることき——單なる折衷・和解の産物ではない。²⁾それは漸次的發展と飛躍的發展との實在するがまゝの辯證法的統一の

人間意識への正しい反映であるのである。我々は量の質への並びにその逆の轉化の法則を形式主義的に使用することなく、この一般的法則を手引として客觀的世界のなかにその具體化として實在する量から質へ・質から量への運動を具體的に・すなはち實在するまゝを餘すところなく、把握しなければならぬ。「眞の辯證法はその對象において何ももの残さない³⁾」のである。

(1) シロコフ・ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、三八七頁。

(2) 「メンシェヴィキ化しつゝある觀念論者は闘争において解決される矛盾のかかりに「兩極」和解の原理を提唱し、穩健着實な「中庸」の立場に立つ。」(シロコフ・ヤンコフスキー編輯、同上、三八八頁)。

(3) Hegel, Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie. I. S. 327.

第三章 否定の否定の法則

I エンゲルスは「否定の否定の法則」を自然・人間社会・思维の最も普遍的な法則の一つに数へてゐる¹⁾。否定の否定の法則は辯證法の三大法則——根本法則の一つ・「辯證法の第三の根本法則」であつて、「自然と人間社会および思维の發展における非常に重要な一般的意義」を有してゐるところの法則・「極めて一般的な廣般に作用する辯證法の法則の一つ」である³⁾。

- (1) エンゲルス、『自然辯證法』、下巻、八一頁。
- (2) シロコフ、ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、四三五頁。本書の「第五章」(こゝで當面の問題たる否定の否定の法則)は簡潔にそして特殊な駄辯なしに書かれてゐる。だが隨所で具體的に、明白に且つ通俗的に書かれてゐるのではない」と『マルクス主義の旗の下に』、一九三三年、第三號は評してゐる。(『唯物論研究』、第三十三號、一三四頁)。

(3) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二四七頁。——「(古在) 否定の否定の法則というのは、どうですか。辯證法の根本的特徴を取上げる場合に特別に取上げなくてもいいのから。勿論取上げてもいいわけですがね。(松村) ここ「スターリン『辯證法的唯物論と史的唯物論』」にかかげてある範圍の法則ほどに基本的ではないといふ風に僕は今でも考えているのですが、しかし非常に基本的だというように高橋君などは考えている。エンゲルスは三つの中の一つにあげている否定の否定の内容ですが、最初の肯定の中に同時に否定を理解し、その否定の中にまた新しいものの肯定を理解しなければならぬ、といふ形で理解すれば、これは最も基本的なものだと思ふのです。つまり辯證法というのには、或るものが消滅することを理解するだけでなく、古いものが消滅する時にどういふ風に新しいものが生れるかということも理解しなければなりません。古いものの否定の中に新しいものの肯定をみなければなりません。單に否定を理解するのではなくて、同時に又肯定を理解しなければなりません。これは非常に基本的だと思ふのです。しかし所謂否定の否定、三つ並べておいて最初の段階と三つ目の段階と比べてみるといふのは、どうも僕には非常に基本的なものとは思えない。……辯證法は一方では、新しいものの發生を理解することでありませけれども、しかし新しくなるといつても何もかも新しくなるのではなくて、やっぱり古い段階の一定の特徴は、新しい段階に繰返されることがあると思ふのです。それをむしろ僕は否定の否定といふ風に理解したいのです。」(古在由重、松村一人、伊豆公夫、『スターリン「辯證法的唯物論と史的唯物論」研究(一)』、二七一—二八頁)。

否定の否定の法則は、辯證法の心髓たる對立物の統一の法則の違つた表現・發現・具體化である。「否定の否定の法則は(量の質への並にその逆の「轉化の」法則と同じく)、辯證法の(最)根本法則即ち辯證法の「眼目」・「核心」たる對立の統一の法則の發現であり具體化である。」¹⁾すなはち對立物の統一の法則として反映される内的矛盾(對立物の統一および闘争)による自己運動の通過するところの過程の描く姿を一般的に概括的に反映したものが、否定の否定の法則なのである。否定の否定の法則は、矛盾(對立物の統一)の發現たる運動・「發展の全體的過程を定式づけるもの」²⁾である。「否定の否定の法則は、發展の相異なる段階の間の、一の事物のその對立への轉化の全環の間の聯結および全法則性を反映し、全體としての發展の全過程を包括する」³⁾のである。かくして否定の否定の法則は發展(運動)に關する我々の理解を一段と深めるものである。⁴⁾

- (1) ソヴェト大百科版、『辯證法的唯物論』、二一九頁。
- (2) 永田廣志、『唯物辯證法講話』、一九三頁。
- (3) ソヴェト大百科版、同上、二一八頁。
- (4) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二四八頁。

ヘーゲルは彼の論理學の體系全體を組みたてるために否定の否定の法則を驅使してゐる。「第三の

法則「否定の否定の法則」は（ヘーゲル論理學の）全體系の建設のための根本法則としての役割を演じてゐる」とエンゲルスは書いてゐる。¹⁾ヘーゲルは觀念論者であつたとはいへ彼の偉大なる天才——革命的ブルジョアジの進歩性に基礎づけられた——は客觀的現實の中から否定の否定をつかみ出し、これを自己の論理學全體系の建設のために使用したのである。「人間は、辯證法の何たるかを知るすつと以前に、既に辯證法的に思惟した、恰かも散文なる言葉の存しないすつと以前から散文を話したのと同様である。自然及び歴史に於て、またそれが認められる迄は無意識に吾人の頭腦に於て行はれてゐた否定の否定なる法則はヘーゲルに依つて初めて明確に組織されたに過ぎない。」²⁾しかし、ヘーゲルが明確に組織だてそして彼の論理學全體系の建設のために驅使してゐるところのものを概括的集約的に抽出して否定の否定の法則として一層明確に定式づけたのは、エンゲルスであつた。このやうに否定の否定の法則は偉大なる思想家たちの頭腦を経過して人類意識の中に自覺的に形成されたとはいへ、それはやはり客觀的に實在するもの人間意識への反映であつたのである。レーニンはかういふ。「天文學的運動も、力學的（地上の）運動も、動植物や人間の生命も——そのすべては、運動の理念のみならず、出發點への復歸を伴ふ運動（否定の否定の運動）即ち辯證法的運動の理念を、人間の頭に叩き込んだ」と。

(1) エンゲルス、『自然辯證法』、下巻、八一頁。

(2) レーニンはヘーゲルをかう評價する。「ヘーゲルの論理學の總計と摘要、究極と核心は辯證法的方法である——これは極めて注目に値する。もう一つ——この最も觀念論的なヘーゲルの著作では觀念論が最も少なく唯物論が最も多い。矛盾してゐるが、事實だ！」（レーニン『哲學ノート』、第一冊、二八三頁）。

「ヘーゲルは、哲學は思惟の學、一般的なものの學であり、一般的なものは思想であるといふので、哲學としての唯物論は不可能であると、心から「信じ」そう考へてゐた。……「しかし」客觀的（さらに絕對的）觀念論は曲りくねつて（且つころびころんで）びつたり唯物論に辿りつき、一部は唯物論に轉化しなへした……」（レーニン、同上、第二冊、二二五頁）。「明敏な觀念論は、愚昧な唯物論よりも、明敏な唯物論に近い」と。（レーニン、同上、第二冊、二二三頁）。なほ「ヘーゲルの『論理學』の中で天才的に云ひ當てられ、處々で見事に展開されてゐる、現實性および認識の辯證法的發展の一般的法則」云々。（バムメリ・ミーンチン其他著・廣島定吉譯、『ヘーゲルと辯證法的唯物論』、昭和八年、二〇一頁）。「ヘーゲルは進んで、思辨的の敘述の中に、屢々現實的な、事物自身を把握する敘述をはさんでゐる。この思辨的説明の中の現實的の説明が、讀者を騙つて、思辨的の説明を現實的の説明だとし、現實的の説明を思辨的の説明だと思はしめるのである。」（マルクス、エンゲルス、『神聖家族』、五七八頁）。「觀念論體系の貴重な成果たるヘーゲル辯證法——この眞珠の粒」云々。（レーニン、『唯物論と經驗批判論』、中巻、一七一頁）。「ヘーゲル主義の神秘的殻のうちに存する深い眞理の一粒」云々。（レーニン『哲學ノート』、

第三冊、一三五頁)。「ヘーゲルの偉大さはどこにあつたかと言へば、それはヘーゲルがその論理を多くの場合、実際には、諸科學そのものから學んでいるところにある。ヘーゲルはその實、自然、社會、および認識に関する深く深い知識から哲學的普遍化を行いつつながら、これに再び思辨的證明を與えているのである。」(松村一人、『ヘーゲルからの前進と後退』、二九頁)。しかしレーニンも「ヘーゲルの論理學をそのままの形で適用することは出来ない、與へられたものとして取り上げることが出来ない。理念の神秘を取り拂つて、その中から論理學的(認識論的)ニューアンスを選び出さねばならぬ」(『哲學ノート』、第二冊、二〇五頁)と書き、また「マルクスが行つてゐるやうな唯物論的に理解されたヘーゲルの辯證法の適用を據りどころとして、われわれはこの辯證法をあらゆる方向に向つて完成せねばならない」(松村一人譯、『戰闘的唯物論の意義について』、『社會評論』、第三卷、第六號、四一頁)と書いてゐる。——辯證法的唯物論の研究に對するヘーゲル研究の意義。「(古在)……辯證法的唯物論を學ぶ場合に、ヘーゲル哲學そのものを研究してかかるといふ必要がどの程度にあるかといふ問題。(松村)私の考えでは、ヘーゲルからとりかかるといふことは、非常にまわりみちになり、無駄足になるので、辯證法的唯物論を一應學んでから、そしてかなり進歩してからヘーゲルを學ぶという態度が正しいと思います。……どんな學問でも、最も進んだ立場を學んでこそ過去のどういふものをどういふ風に攝取したらいいかがわかると思ひます。……」(古在由重、松村一人、伊豆公夫、『スターリン「辯證法的唯物論と史的唯物論」研究(一)』、八一―九頁)。なほ別の場所から引用するならば、「辯證法の今なおみつゝされていらない源泉の一つは、ヘー

ーゲルである。辯證法を研究しようとする人は、一度はヘーゲルと對質しなければならない。……このことは、しかし、言うまでもなく、辯證法の研究をヘーゲルからはじめなければならぬことを意味しない。わたしの考へでは唯物論的な辯證法の根本的な立場を學んで、はじめにヘーゲルから多くのものを學ぶことができるのである。」(松村一人、『ヘーゲルからの前進と後退』、二八頁)。

- (3) エンゲルス、『反デュリング論』、三一―八頁。 (4) レーニン『哲學ノート』、第三冊、三〇―一頁。

辯證法的運動・否定の否定の運動の特徴づけにおいて、レーニンの規定は、否定の否定の法則のマルクス主義的解釋を「さらに一層發展」させてゐる。レーニンの規定はたとへばかうだ。「すでに經過した段階をいはずもう一度、だが前とはちがつてより高い基礎の上に(「否定の否定」)經過するところの發展、直線的にでなく、いはゞ螺旋狀に行はれるところの發展」。——これは「流行のものより遙かに内容充實した發展學說としての辯證法の若干の特徴」としてレーニンが書き付けてゐるところのものである。「より低い段階の一定の特徴、特性等々の、より高い段階における反覆」。「外見上舊きものへの復歸(否定の否定)」。「——これは「辯證法の諸要素」の第十三および第十四項目にレーニンが書きしるしてゐるところのものである」²⁾。

- (1) レーニン、『カール・マルクス、他五篇』、二四―二五頁。

(2) レーニン『哲學ノート』、第一冊、二五九頁。

II 發端・最下位の發展段階・發展の第一段階はそれ自身特有の内的矛盾をもつてゐる。このことは、或る事物はそれ自身において、自己の否定・ヨリ新しきものへの轉化⇨聯結・ヨリ高度の段階への移行⇨聯結を準備することを意味する。しかして或る事物は、それ自身特有のかゝる内的矛盾（内在的な對立物の統一・固有の運動法則）によつて自己を否定して新しきものへ轉化するとき、その反對物へ移行する。それ故に或る事物の發展において、後續の段階・第二段階は先行の段階・第一段階の反對物である。先行の第一段階はそれ自身の内部に反對物への移行を準備し、後續の第二段階はこの先行の第一段階の新しきものへの轉化としてのその反對物である。一切の發展は否定を通して行はれるから、當然にまた反對物への轉化の形式をとる¹⁾のである。このことはヘーゲルの次の言葉からも明かである。すなはち「辯證法的契機は……有限なる諸規定の、固有の自己止揚であり、また有限なる諸規定のその反對物への移行である。」「有限なるものは……それ自身の本性によつて自己を止揚し、それ自身によつてその反對へ移行する。……一般に有限なるものはそれ自身において矛盾し、このことによつて自己を止揚する。」「辯證法によつて、有限なるものは、即時的にそれ自身の他者として、

それが直接的であるゆゑんのものをも越えて追ひやられ、そしてその反對物に變るのである。」「

(1) 永田廣志、『唯物史觀講話』、一〇八一—一〇九頁。「精神的世界特に法律的なものおよび道徳的なものの領域において辯證法が存在することに關しては、こゝにはたゞ、一般の經驗上、如何に或る状態或ひは或る行爲の極端はその反對物に轉化しがちであるかを想ひおこせばいい。この辯證法はいろいろと諺のなかで承認されてゐる。たとへば「法も過ぐれば不法をまねく」(summum jus summa injuria.)といはれてゐるが、これは抽象的な法はその尖端に驅りあげられて不法に轉化することをいひあらはしてゐる。同様に、政治においては無政府と専制主義との兩端は相互に誘致しがちであることは、周知のごとくである。個人的形態の倫理の領域における辯證法の意識を、我々はあの一般周知の諺、「傲るものは久しからず」(Hochmuth kommt vor dem Fall.)——「過ぎたるは及ばざるがごとし」(Allzuscharf macht scharf.)などのなかに見出す。感覺すなはち肉體的感覺ならびに精神的感覺もまたその辯證法をもつ。いかに苦しみや悲しみの極端が相互に移行しあふかは、人のよく知るところである。喜びでみたされた心は涙でもつてやわらげられ、最も深い悲しみは事情によつては微笑によつて表現されがちである。」(Hegel, System der Philosophie. I. S. 193-194)。

(2) Hegel, *ibid.* I. S. 193-194.

(3) Hegel, *ibid.* I. S. 190-191.

(4) Hegel, *ibid.* I. S. 192-193.

この反對物・新たなるもの・第二段階は、第一段階の固有の矛盾の解決・第一段階の轉化せるものであるが故に、第一段階を止揚してそれを内的に保有せるもの・第一段階によつて豊富にされたもの・第一段階によつて「媒介されたもの」である。ヘーゲルは、「かくして成立したところの第二のものは、したがつて、第一のものの否定……である。直接的なものは、かゝる否定的な面からすれば、他者の中で消滅してしまつてゐるが、しかしこの他者は、本質的には、辯證法の普通の結果として考へられるやうな空虚なる否定的なもの、無ではなくて、それは第一のものの他者、直接的なものの否定されたものであり、それ故にそれは媒介されたものとして規定されてをり、——つまり第一のものの規定を自分の中にくんでゐる。したがつて第一のものは本質的にまた他者の中に保存され且つ維持されてゐる」と述べてゐる。

(5) Hegel, *Wissenschaft der Logik*. II. S. 494-495.

以上によつて見れば、(一)第一段階と第二段階とは反對の關係に立つてゐること、および(二)第一段階と第二段階とは、第一段階の内的矛盾の發展・綜合、それ故に第一段階の否定・止揚によつて、内的に聯結してゐることが分る。

(1) 二つの段階の内的聯結は矛盾による聯結・否定による聯結である。「この聯結、差別は、そこにおいて否定が推進力として立ち現はれもするところの、矛盾の發展によつて與へられる。」(シロコフ、ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、四四〇頁)。しかして聯結は必然性・一般者・本質である。レーニンは『哲學ノート』において、ヘーゲルの『哲學史講義』中のヘラクレイトスに關する敘述のなから、「理性的なもの、私の知る眞なるものは、なるほど、感性的なもの、個別的なもの、規定されたもの、存在するものとしての對象的なものからの復歸である。しかし理性が自分の中で知るところのものは、同様に必然性すなはち存在の一般者である。それは世界の本質であると同様に、思惟の本質である」(Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie. I. S. 368)と、文章を抜書し、これに「注意、必然性——存在の一般者」(存在における一般者)、「聯結、「絶體的媒介」」と評註してゐる。(第二冊、二〇三頁)。

Ⅲ 第二段階は、第一段階の内的矛盾の綜合・解決として生起してきたるその反對物であるが、それ自身また矛盾を内有するもの、第一段階の矛盾とは異なるそれ自身特有の矛盾(固有の運動法則)・特有の對立物の統一・したがつて第一段階の質とは異なるそれ自身特有の質を有するものである。「あらゆる段階は、先行の段階の矛盾の獨自の形態を克服し、それを否定し、新段階に固有な矛盾の形態を生み、それによつて己れ自身の否定を準備する。」第二段階は、この特有の内在的矛盾によつ

て、更に新たな質、新たな矛盾（新たな運動法則・新しい對立物の統一）を内有するところの第三段階へ移行する²⁾。この場合、第三段階は、第二段階の矛盾の解決・第二段階の否定＝止揚として再びその反對物である。第三段階は第二段階の反對物として形成されるのである。³⁾「AがBに轉化する」とすれば、BはAにおける否定的契機を根據に有するから、それはAの對立物である。次に、Aの對立物Bが更にその對立物Cに轉化する⁴⁾。かくして第一段階も第二段階もまた第三段階も、おしなべてすべての段階が、「自己自身の絶えざる止揚（das beständige Aufheben seiner selbst）」として「その反對物への轉化」(da Umschlagen in sein Entgegengesetztes)である⁵⁾。

(1) シロコフ、ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、四三九頁。

(2) 「實在はその發展段階によつて、それぞれ新しい性質をあらはし、新しい諸法則にしたがふやうになる。この場合より低い發展段階の諸法則はより高次の發展段階のうちで決して消失することはないが、といつてより高次の發展段階の諸法則と同じではない。一例をあげれば、人間は動物であり、動物的な諸法則に従つてゐる。しかし、人間はその社會生活によつて人間独自の生活條件にしたがひ、人間独自の發展の法則を持つてゐる。もし人間をあくまで動物進化の法則のもとに理解しようとするれば、ダーウィンが、「人間の由來」で行つてゐるやうに、動物としての人間しか理解できないであらう。そして人間がまさに人間

となるとき、その説明は甚しい誤謬と變るのである。……もし最も初歩的な段階に見出される諸規定をとつて、それをもつてあらゆる發展段階を理解しようとするれば、その諸規定は特定の領域から不當に擴大され、限界を越える誤謬が犯されることとなる。そして同じことは例へば人間の生活から動物の生活を理解しようとして動物を不當に人間化するやうな場合にも生じる。これはより高次の段階に特有な屬性をもつてそれより低い段階に適用しようとする誤謬である。(松村一人、『ヘーゲル論理學研究』、二二—二四頁)。

(3) 第三段階・第三のもの(das Dritte)は、第一段階・第一のものの他者(第二段階・第二のもの)の他者・略して「他者の他者」(das Andre eines Andern)である。(Hegel, Wissenschaft der Logik. I. S. 496 参照)。

(4) 永田廣志、『唯物辯證法講話』、一九四頁。

(5) Hegel, System der Philosophie. I. S. 198 参照。

この限りにおいては、第二段階と第三段階との間には、第一段階と第二段階との間におけると同様の關係がある。すなはち第二段階と第三段階とは、(一)たがひに反對物の關係にたつてをり、(二)第二段階の矛盾の發展・解決、それ故に第二段階の否定・止揚によつて、たがひに内的に聯結してゐるのである。

第三段階は、右に明かにしたやうに、第二段階の反對物である。しかるに第二段階は、さきに明か

にしたやうに、第一段階の反對物である。それ故に第三段階は、第一段階がその反對物に變つたものがまたその反對物に變つたもの・第一段階の反對物の反對物・したがつて第一段階への復歸¹⁾・第一段階の再興・それ故に取りもどされた第一段階・再興された第一段階である。ヘーゲルの言葉を引用するならば、「この否定性〔第二否定〕は、自己を止揚する矛盾として、第一の直接性、單純なる普遍性の再生である。何となれば他者の他者、否定の否定は直ちに肯定的なもの、同一的なもの、普遍的なものであるからである。」²⁾ しながら第三段階は、第二段階を止揚して自己の内部に保存し第二段階によつて媒介され豊富にされてゐるのであるから、第一段階そのものへの單なる復歸・第一段階そのまゝの單純なる再興ではなくて、はるかに内容的に豊富になつた第一段階・「より高度の基礎」³⁾「より高度の段階」において再生された第一段階である。第三段階が第一段階への單なる復歸に見えるのはたゞ「外見上」のことからである。レーニン⁴⁾は否定の否定の運動を「外見上舊きものへの復歸」と規定するとともに、「より低い段階の一定の特徴、特性等々の、より高い段階における反覆」として正確に規定した。³⁾ この點から見れば、「發展は……より高い段階において、従つて異つたより豊富な内容を以つて、舊いものの特徴がくり返されることである」といはねばならぬ。第三段階を生み出す第二段階の否定は「何らかの點で舊きもの一定の特徴を質的により高度の基礎の上に再生す

る新しい否定⁵⁾」であるといはねばならぬ。かくして、第三段階特有の矛盾(運動法則)は、また、第一段階特有の矛盾(運動法則)と直ちに同一ではなくて、より高度の基礎における第一段階特有の矛盾(運動法則)の再生・第一段階特有の矛盾(運動法則)の複雑化・高度化せる形態である。⁶⁾

(1) ヘーゲルの言葉では「自分自身への復歸」(Zurückkehren in sich selbst)「直接性の否定性による自分自身への復歸」das Zu-sich-selbst-kommen durch die Negativität der Unmittelbarkeit) である。(Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 497, u. S. 503.) なほ、それは「出發點への復歸」・「初めへの復歸」である。(ソヴェト大百科版、『辯證法的唯物論』、二二二頁)。

(2) Hegel, *ibid.* II, S. 497. 「第三のものは、直接的なもの、しかし媒介の止揚による直接的なものであり、區別の止揚による單純なもの、否定的なものの止揚による肯定的なものであり、他在によつて自己を實在化しそしてこの實在性の止揚によつて自己と合致し自己に對する自分の單純な關係を回復したところの觀念である。それ故にこの結果は眞理である。それは直接性であるとともに媒介である。」(Hegel, *ibid.* II, S. 498-499.) (3) レーニン『哲學ノート』、第一冊、二五九頁。

(4) 永田廣志、『唯物史觀講話』、一一〇頁。

(5) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二四九頁。

(6) 「シンテーゼ〔第三段階〕とテーゼ〔第一段階〕とは、そのいくたの舊形態において相互に類似してゐる

る。(シロコフ・ヤンコフスキー編輯、「唯物辯證法教科書」、四五八頁)。

Ⅲ 辯證法的運動の描く過程を總體として見るならば、第一段階がその反對物たる第二段階となり、この第二段階がその反對物たる第三段階すなはちヨリ高度の基礎の上に再興された第一段階・ヨリ豊富化する内容をもつて再生された第一段階となる¹⁾。發展の過程は、出發點Ⅱ第一段階から出でて、第二段階を通過し、第一段階へ、しかしヨリ高度の次元における新しい第一段階へ曲け返される。辯證法的發展の過程は、したがつて、圓形を描く過程・正しくは螺旋を描く過程・「螺旋状に行はれるところの發展³⁾」の過程・「圓環の系列」として螺旋状の發展曲線⁴⁾である。それは決して直線を描く過程・直線的過程・直線形過程ではない。それは螺旋形過程なのだ。「過程は後續の發展の結果によつて豊富にされ、これらの反覆された特徴をより高度の基礎の上に再生し、全體としての發展過程は、螺旋を描いて行はれる。」⁵⁾ されば辯證法的運動は、その經過する過程の形態からすれば、出發點へたちかへる運動・出發點への復歸を伴ふ運動⁶⁾・圓運動・圓形運動・螺旋形運動である。辯證法的發展觀Ⅱプロレタリア發展觀は「螺旋形發展⁷⁾」觀である。「初めへの復歸、發展の螺旋型は、……辯證法的運動の最も特色的な特徴の一つである。」⁸⁾ レーニンは『哲學ノート』に「出發點への復歸を伴ふ運動即ち辯證

法的運動」と書き附けてゐる。⁹⁾ ところで、螺旋の過程を描く辯證法的運動は、出發點への復歸・あともどりであるが故に後退の運動であるといふことができるが、しかしまた出發點が自己を豊富化し自己を展開し行く運動であるが故に前進の運動であるともいふことができる。辯證法的運動は、だから前進と後退との統一であるといふことができる。「規定展開における進行の一步一步は——とヘーゲルはいふ——無規定の端初から遠ざかることであると同時に、また端初の方へあともどりしながら近づくことであつて、したがつて、はじめのうちはおそらく異つたものとして見えることがら、すなはち後退しながら端初を基礎づけること」(das rückwärts gehende Begründen des Anfangs)と前進しながら端初の規定を展開すること¹⁰⁾ (das vorwärts gehende Weiterbestimmen desselben)とは、たがひに一致し且つ同一のことである。」

(1) 辯證法的運動は「單純なるものから複雑なるものへの運動」である。そしてこの運動は無限の反覆する發展の過程である。「その「辯證法哲學の」前に在るものは、唯生成と衰滅、無限に低きより高きへ進む永劫不斷の過程のみである。」(エンゲルス、「フォイエルバッハ論」、八八二頁)。「發展過程は、圓環運動として、過ぎ去つたものの單純なくり返しとして理解すべきでなく、前進運動、上向線に沿ふ運動として、古い質的狀態から新しい質的狀態への移行として、單純なものから複雑なものへ、低いものから高いもの

- への発展とし理解すべきである。」(ハスターリン、『辯證法的唯物論および史的唯物論について』、六頁。)
- (2) こゝに圓とは、「出發點と終結點が互ひに閉合する完全な圓」のことではなくて、螺線の環のことである。圓においては出發點と終結點は一致する。しかし、發展曲線の終結點が出發點と全く合一するのである。ヘーゲル辯證法におけるやうに、發展は窮極的に完結し、絶對的眞理が到達されたことになる。無限の發展を認める唯物辯證法においては、發展曲線は「圓の系列」としての螺線である。螺線の一つ一つの環は圓形ではあるが、出發點と終結點が互ひに閉合する完全な圓ではない。出發點は先行する環に結びつき、終結點は次の環に接続する。しかし終結點と全然異つたものではない。前者は後者にやはり或る意味では「復歸」してゐる。」(永田廣志、『唯物辯證法講話』、一九三頁)。ヘーゲルは彼の『哲學史講義』のアナクサゴラスの哲學の場所から述べてゐる。「みづからの中に完結するものは圓であるが、しかしその圓の完結は同様に他の圓への移行——すなはち螺線である。この螺線が歸つて行くところのこの螺線の中心點は、この螺線を呑みこむところのヨリ高度の圓の圓周の中に直接横たはつてゐる。」(Hegel, Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie. I. S. 430)。
- (3) レーニン、『カール・マルクス』、二四頁。これはかういふふうにも考へ得る。第一段階から第二段階へ、第二段階から第三段階への移行は、或るものが新しいものに轉化すること・或るものが最初の質よりは別の質となること・すなはち最初の質の外に出ること・それ故に自己の外に出ること・しかしながら第一段階への復歸・發端への復歸・それ故に自己への歸還・自己の中へたちもとることである。ヘーゲルは

「自己の外に出ること」(Ausser-sich-gehen) すなはちヨリ進んだ規定のおのおの新しい段階は、また自己の中へ行くこと(In-sich-gehen)である」と『大論理學』のなかに述べてゐる。(Hegel, Wissenschaft der Logik. II. S. 502)。

- (4) 永田廣志、『唯物史觀講話』、一一〇頁。
- (5) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二四九頁。
- (6) 「機械論者は出發點への復歸を絶對的復歸として、舊きものの完全なる復興として考察する。」(ハッヴェト大百科版、『辯證法的唯物論』、二二二頁)。機械論者たちは、その認識能力のブルジョア的—支配者階級的制限の故に、辯證法的運動・否定の運動・螺線形運動の外に、現象形態面のみとらわれ、出發點への復歸といふその「外見」にのみ固着して、それを舊きものへの單なる復歸として把握し、かくして循環論・循環説へと偏向してゐる。「形而上學的な循環論」・「機械論的な循環論」がすなはちこれである。「シンテーゼ(第三段階)」はそのうちに先行する段階を止揚する。一見、テーゼ(第一階段)へ、しかしアンチテーゼ(第二段階)の發展によつて豊富化されたテーゼへ復歸する。最初への復歸のかやうな理解のうち、辯證法的な發展學説と、形而上學的な循環論との間の差別が存する。十八世紀の機械論的な循環説は自然及び社會においては、常に出發點への復歸、單なる最初の繰返しが生ずると主張した。例へば全社會は原始的な野蠻状態から現在の文化状態に高まつたのであるが、その發展の最高點において再び衰退に赴く。次の循環は再び最低段階から野蠻から始まる。彼等はいふ、動物界における發展もさうである。動物

の種は繁殖し發展し死滅する。次の世代も同じ循環を繰り返す。機械論的な循環論は、發展は單なり繰り返しては、循環は發展の外的表現形態であるといふことを見てゐない。」(シロコフ・ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、四六〇頁)。このやうな形而上學的・機械論的循環論は、單なる反覆を説く見解・同じところにとどまつてたえず繰返すと見る見解・同一質にとどまると見る見解・結局は、そして本性的には、發展(質から質への移行)を否定するところの見解であつて、反動的な現状維持といふ支配者階級ならびにその陳腐にひきよせられた社會層の意欲に好適なる見方である。我々は「循環」といふ範疇に反動性を見なければならぬ。なるほど辯證法的運動・螺旋形運動も見かたによつては一種の循環運動といへよう。しかし、それは出發點と復歸點とが次元を異にするやうな循環運動なのだ。「發展は循環的に行はれる。併し最終の環は最初と一致せず、循環過程の出發點の上にある。ジンテーゼ(第三段階)はその後の發展の出發點として、従つて新しい循環過程におけるテーゼ(第一階段)として立ち現はれる。」(同上、四六一頁)。

(7) シロコフ・ヤンコフスキー編輯、同上、四六一頁、參照。「發展の進行は直線的ではなくて、廻りくねつた、矛盾した過程であり、一の段階から他の段階への移行に際して、圓形の轉換が必然的に行はれるといふのは、對象又は現象の内的矛盾の發展は、各々後續の段階において、對立へのその移行をもたらすからである。」(ミイチン監修、同上、二四八頁)。

(8) ソヴェト大百科版、同上、二二二頁。

(9) 第三冊、三〇一頁。「運動および生成は、一般的に云つて、反覆なしに、出發點への復歸なしにあり得

るが、その時は、かかる運動は「對立の同一性」ではない。」(同上、第三冊、三〇一頁)。

(10) Hegel, Wissenschaft der Logik. II. S. 503. 「この端初への復歸は同時に一つの進展である¹⁾」

(Hegel, System der Philosophie. I. S. 452)。「前進は根據のなかへの、すなはち根源的且つ眞なるものへの、復歸であつて、出發點とされたものはこの根據に依存し事實この根據によつて産出されるものであるといふことが、本質的な考察……であることを、我々は承認しなければならぬ。」(Hegel, Wissenschaft der Logik. I. S. 55)。

V 第二段階は第一段階の否定である。この第一段階から第二段階への轉化・移行・發展は「第一否定」である。第三段階は第二段階の否定である。この第二段階から第三段階への轉化・移行・發展は「第二否定」である。かくして第二否定は、第一段階を「否定」するところの第一否定をもいちど否定すること・第一否定の否定・すなはち「否定の否定」・それ故に肯定(高度の肯定)である。(したがつて第三段階は、第一段階の否定であるところの第二段階をもいちど否定したところのもの・第一段階の否定の否定・すなはち「否定の否定」・それ故に第一段階の肯定(たゞし高度の基礎の上における肯定)・第一段階への復歸(高度の基礎の上における第一段階の再生)である。)²⁾

(1) 「否定の否定は肯定的なものである。……この見解は、かゝる正當性を有するのみでなく、また

かゝる規定の普遍性の故に、その無限のひろがり一般的な適用とを有するもので、したがつてとにかく注目すべきものであらう。」(Hegel, Wissenschaft der Logik. I. S. 89)。

(2) 「Aはその次に出てくる反対物によつて否定され、この反対物は再び否定されて最初と同じ形態をもつものが復活してくる。マルクスもエンゲルスも「否定の否定」にこのような意義をも見出してはいる。しかしそれはまず第一に、外から張りつけられる公式としてではない。次に、もつと重要なことは、この形の否定が辯證法の唯一の根本法則と考えられているのではなく、発展の複雑性を理解する一つの重要な法則と考えられているにすぎないということである。……発展とは、古い形態と内面的聯關をもちながら、不斷に新しい形態が生じてくることである。しかし、古いものの特徴が全く繰りかえされないのではない。本質的に新しいものが生じながら、古い特質がより豊かな内容をもつて歸つてくる場合もある。これがいわゆる否定の否定の眞の意味であつて、それは普通考えられているような豫見の公式ではないのである。」(松村一人、『ヘーゲル論理學の研究』、六一頁)。

されば辯證法的運動の過程は、第一否定と第二否定との統一・否定と否定の否定との統一(それ故に「二重の否定」)・肯定から出でて否定へそれからさらに否定の否定(高度の肯定)への過程・「肯定↓否定↓否定の否定」の過程・「肯定↓否定↓肯定(高度の肯定)」の過程である。(この點から見ても辯證法的運動の過程が元へ立ちもどる過程・圓形を描く過程・螺旋を描く過程であることが明か

である。)このやうな辯證法的運動の描く過程の様相の人間意識への反映(模寫を、エンゲルスは「否定の否定の法則」として表現したのである。)²⁾「各々第二の發展段階が第一段階の否定であり、新しい第三の段階もまたそれで第二段階を「否定する」以上あらゆる發展は否定の否定として行はれる。以上が、簡単に云へば、マルクス・レーニン主義が否定の否定の概念に取り入れた豊富な内容である。」「一の對立の他の對立への移行、一の質の他の質への轉化は、實は前者を否定することである。しかし發展の過程はこれにのみとどまらない。新たに發生した質も、同じくこの内的矛盾に基いてそれ自身の對立へと移行する。否定は第二の否定によつて止揚される。與へられた對象の發展の全環は否定の過程を表す。否定の否定の法則は、發展の相異なる段階の間の……聯結および全法則性を反映し、全體としての發展の全過程を包括する。」⁴⁾

(1) 「二重の否定は實際においてあらゆる現實性の一般的な運動形態である。」(シロコフ、ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、四六〇頁)。「二重の否定はあらゆる發展のリズムを表現し、過程の内的リズムの形式をなす。」(ソヴェト大百科版、『辯證法的唯物論』、二二五頁)。それ故に、辯證法的運動は「否定を通じた發展」(ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二五三頁)「矛盾によつて生ずる否定および否定の否定を経ての發展」(シロコフ、ヤンコフスキー編輯、同上、四三九頁)である。この限りにおいて、

- 辯證法は「否定の辯證法」・「否定の否定の辯證法」といふことができる。(同上、四四五頁、四四六頁)。
- (2) エンゲルス、『自然辯證法』、下巻、八一頁、參照。
 - (3) ミーチン監修、同上、二四九頁。
 - (4) ソヴェト大百科版、同上、二一八頁。

かくして辯證法的發展の過程は三つの段階をふくむ。第一段階すなはち出發點としての段階・第二段階すなはち否定の段階・第三段階すなはち否定の否定の段階(ヨリ高度の基礎の上における出發點への復歸の段階)の三つの段階である。辯證法的發展は「三つの繼續的段階を進む發展」なのだ。しかし辯證法的運動はこの三つの段階をもつてその發展の過程を完了するのではない。この三つの段階は螺線形發展の一圓環を形成してゐるにすぎない。第三段階は、先行の發展の進行を完了し、先行の螺線的圓環を完了すると同時に、新しい發展の進行の出發點—第一段階・新しい螺線的圓環の出發點—第一段階となる³⁾。かくして發展は無限につゞく。發展には限界がない。發展は停止するところを知らない。螺線の圓環は一段一段と積み重ねられて無限につゞく。辯證法的運動は螺線を描く無限の過程である⁴⁾。「唯物辯證法は發展の過程を「否定の否定」の公式に要約して、發展過程のうちに三つの重要な段階—出發點、否定の段階、出發點への復歸、すなはち否定の否定といふ第三のより高度の段階

を引き出す。しかしこの否定(の否定)の段階を以て發展過程が終了を告げると考へるのは、間違つてゐる。發展には限界はない。否定の否定は單に先行の發展の進行を完了するばかりでなく、今度は更により一層の發展のための、新しい矛盾の發現のための、新しい「否定」のための出發點となる⁵⁾。

- (1) 個々の段階は、それぞれ、内容的—細部的には、ヨリ高度の基礎の上に出發點へ復歸するいくつかの圓環の組合せである。「あらゆる個別的段階は内的矛盾の發展によつてヨリ部分的なテーゼ[第一段階]及びアンチテーゼ[第二段階]に分裂し、新たな完成を、全發展をヨリ高度な段階に高めるところのシンテーゼ[第三段階]に見出す、例へば私有財産の矛盾は、その契機的な部分的解決を、奴隸所有者的、封建的、資本主義的財産形態のうちに見出した。(シロコフ、ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、四五九頁)。
- (2) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二五三頁。レーニンはいふ。「辯證法的唯物論のみが、「端初」を繼續および終りと結びつけた。」(哲學ノート)、第三冊、二五一頁)。
- (3) 「シンテーゼ[第三段階]はその後の發展の出發點として、従つて新しい循環過程〔圓環過程〕におけるテーゼ[第一段階]として立ち現はれる。」(シロコフ、ヤンコフスキー編輯、同上、四六一頁)。
- (4) 辯證法的運動の無限は、「直線過程」としての無限でもなくまた「循環過程」としての無限でもなくて、「螺線過程」としての無限である。(エンゲルス、『自然辯證法』、上巻、一六二頁、參照)。
- (5) ミーチン監修、同上、二五三頁。ものの歴史(運動・變化)を把握するに、甲段階→乙段階→丙段階↓

丁段階↓戊段階↓……といふふうに直線的に把握することは、事實を歪曲するものであつて、事實を正しく反映し模寫するものではない。歴史の事實を正しく把握するには、螺旋的圓環を構成する三つの段階ごとくに一とくりとして、象徴的にいふならば、「甲↓非甲↓甲」・「甲↓非甲↓甲」・「甲↓非甲↓甲」……のごとく、把握しなければならない。

第一段層はそれ自身特有の質・特有の矛盾（對立物の統一・運動法則）をもつ。第二段階（第一段階の否定）は、また、第一段階とは異つた・第一段階よりも新しい・それ自身特有の質・特有の矛盾をもつてゐる。第三段階（第二段階の否定）も、同様に、第二段階とは異つた・第二段階よりも新しい・それ自身特有の質・特有の矛盾をもつてゐる。たゞしこの第三段階特有の質・矛盾（運動法則）は、第一段階特有の質・矛盾（運動法則）の、高度化せる基礎の上における、再生である。それ故に辯證法的運動・否定の否定の過程は、舊い質・舊い矛盾からその止揚によつて新しい質・新しい矛盾が発生すること、舊い質・舊い矛盾と新しい質・新しい矛盾とが内的に聯結して、發展の繼起的段階を形成し螺旋形過程を組みたてゝゐることを示す。「量の質への轉化が新しい質の發生を我々に説明するとすれば、否定の否定は、この新しい質が自己否定によつて舊い質から發生することを示し、新しきものと舊きものとの間の内的聯結を發展の繼起的段階として明かにする。」¹⁾かくして圓形

を描く過程・螺旋を描く過程は舊い質・舊い矛盾と新しい質・新しい矛盾との繼起的段階を示すといふことができる。

(1) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二五三頁。

VI 世界におけるすべてのものは運動する。すなはち辯證法的に運動する。しかるに辯證法的運動の過程は否定の否定の過程・圓形螺旋を描く過程である。それ故に世界におけるすべてのものは否定の否定の過程・螺旋を描く過程をたどる。かくして否定の否定は世界におけるすべてのものに・世界におけるすべての場合に・したがつて自然にも社會にも人間思惟にも普遍的である。「否定の否定は自然と社會および人間の思惟の、極めて一般的な廣般に作用する法則であり、發展の各々の過程に固有する法則である。」¹⁾エンゲルスはかう書いてゐる。「それ〔否定の否定〕は極めて單純な、至る處に於て日々に行はれる所の過程である、それは、若し古い觀念主義の哲學がそれをかくしてゐる所の秘密の箱……を取り去るならば、子供にすら理解し得るものである。」²⁾「それ〔否定の否定〕は極めて一般的な、正しくその故に極めて廣く行はれ且つ重要な、自然、歴史〔社會〕及び思惟の發展の法則である。……それは動植物界に、地質學に、數學に、歴史に、哲學に行はれる所の法則……であ

る³⁾。このやうに否定の否定は世界におけるすべてのものに普遍的であるが、否定の否定の明確なる理解の一助のためにこゝに適切なる例證をあげることが許されねばならない。否定の否定の深刻適切なる例證としてエンゲルスが『反デューリング論』の中に書いてあるものの中から引用することとしよう。⁴⁾（もちろんこれは「否定の否定を發展の稀有なる場合と考へてその實例を一生懸命に探し廻る」といふ意味ではない。）

- (1) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二四九頁。
- (2) エンゲルス、『反デューリング論』、三一二頁。
- (3) エンゲルス、同上、三一七頁。
- (4) エンゲルス、同上、三一二—三一七頁、參照。——因みに、ヘーゲルはかう書いてゐる。「我々をとりまくすべてのものは辯證法的なものの實例と見られ得る。」(Hegel, System der Philosophie. I. S. 192.)」

「麥粒を例にとらふ。無数の麥粒は捏がれ、炊かれて、食される。かくの如き麥粒の一つが、當り前の條件の下におかれるならば、即ち適當な土地に落ちるならば、熱度と濕氣の爲に特有の變化を生ずる、それは發芽する。麥粒そのものは消滅する、否定せられる、それから發生した植物がそれに代る、麥粒の否定である。然らばこの植物の正常な生涯はどうであるか？ それは生長し、開花し、結

實し、遂には再び麥粒を作る。然かもこの麥粒が成熟すると同時に莖は死滅する、それ自身が否定される、この否定の否定の結果として我々は再び最初の麥粒を得る、が單に一つではなくて、十倍、二十倍、三十倍の數を得る。麥の種類は極めて緩漫にしか變化しない、従つて今日の麥も百年前のそれと殆んど同じである、が變形し易い裝飾植物、例へばダリア若しくは蘭をとつて見る、種子及びそれから生じた植物を園藝家の技術通りに取扱ふならば、我々はこの否定の否定の結果として單により多くの種子を得る許りでなく、より美しい花を咲かせる質的に改善された種子を得る、この過程の反覆毎に新しい否定の否定毎に、その完成の度が高まる。」

「麥粒と同じやうに、この過程は多くの昏蟲、例へば蝶にも行はれる。それは卵の否定として卵から生ずる、性的に成熟するまで轉形をなし、交尾し、そしてまた否定せられる、即ち生殖過程が完成して雌が無数の卵を生むと同時に、死亡する。」

「更に全地質學は否定の否定の系列である、古い岩石の崩壊と新しい岩石の成層との相繼續した系列である。先づ本來的な、流動的の冷却から生じた地殻が、大洋、氣象、及び風化の作用に依りて破碎され、この破碎されたものが海洋の底に沖積される。場所に依つて海底が海面以上に隆起すると、この最初の沖積のある部分は再び雨、四季の溫度の變化、空氣中の酸素及び炭素の作用を蒙る、地中

から地殻を破つて奔出した、どろどろの、後に冷却した岩石も同じ作用を受ける。数百万年間常に新しい層が作られ、常にその大部分が崩壊され、常に新しい層の構成材料とせられた。然し乍らその結果は極めて積極的である、即ち種々な化學的要素から混成された土地を、無量にして多様な植物を繁茂せしむることの可能な機械的に破碎し得る状態にすることであつた。」

「數學に於ても同様である。我々が任意な代數學上の大いさ、即ち a をとつて見る。それを否定すると我々は $-a$ （マイナス a ）を得る。我々が $-a$ を $-a$ と乗することに依つてこの否定を否定するならば、 $+a$ を得、即ち最初の正の大いさを得る、がより高度の段階に於て、即ち二乗として得る。我々が同じ a^2 を、正數の a をかけ合はせることに依つて得ることが出来ること云ふのは此の場合にも問題でない。何となれば否定された否定は確實に a^2 中に存して居り、それは常に二つの自乗根、即ち a と $-a$ とを有つてゐるからである。この否定された否定、自乗の中に含まれてゐる負の根を切り離すことの不可能は、二次方程式に於て明白なる意義を有つてゐる。……」¹⁾

「歴史に於ても同様である。全ての文化民族は土地の共有を以て始めた。ある程度の原始的段階を脱した全ての民族にあつては、農業の發展に連れて、この共有が生産の桎梏となる。それは止揚され、否定され、或は長い或は短い中間段階を経て私有に變じられる。然し乍ら、土地私有それ自身に依つて招來された、農業のより高度の發展段階に於ては、逆に私有が生産の桎梏となる——今日これは小規模の土地所有に關しても大規模の土地所有に關しても見る所である。同じ様に土地私有を否定し、之を再び共有に變へようとする要求が、必然的に生ずる。然し乍ら、この要求は原始的な共有の復活を意味するのでなくて、共有の遙に高度の進化した形態の樹立を意味するのである、それは生産の障害となる所ではなく寧ろ初めて生産の桎梏を破り、近代の化學上の發見や機械學上の發明を、充分に利用する事を可能ならしむるものである。」²⁾

「古代の哲學は本來的の自然的の唯物論であつた。それ自身として思惟の物質に對する關係を明かにすることが出来なかつた。がこの點を明瞭にしようとする必要は、肉體から分離し得る靈魂の説に導き、更にこの靈魂の不滅の主張に導き、遂に唯一神教に至らしめた。即ち古代の唯物論は唯心論に依つて否定せられた。然し乍ら哲學が更に發展するや唯心論も支持し得なくなり、そして近代の唯物論に依つて否定せられた。この近代の唯物論——否定の否定——は、古代の唯物論の單なる再現ではなくして、その永續的の基礎に、哲學及び自然科學の二千年間の發展、並びにこの二千年間の歴史そのもの、全思想内容を添加するものである。それはもはや哲學ではなくて單純な世界觀である、それは特殊な科學の科學に於て立證され實現されるのでなく、現實の科學に於て立證され實現され

る。即ち哲學はここに「止揚された」のである、言ひ換へれば「同時に克服されまた保持せられた」のである、形式的に克服されたのであり、その實際的な内容からすれば保持せられてゐるのである。」

(1) 「 A は B に對立するものとして A の否定である。 B はこの對立(相互否定)を否定(止揚)するものとして、 A の否定であると同時に、 B の否定である。單に A を否定するだけならば、これにその對立物たる B を乗じたものであるところの A を否定の否定物として取つても良いわけだ。しかし $A \rightarrow B \rightarrow A$ が「否定の否定」の例證としてあげられないのは、 A は B と A の對立を止揚(否定)してゐないからであらう。…對立の統一は外面的には多くの場合「否定の否定」の形式を取る。相互に否定し合ふ——この事は換言すれば「對立」だ—— A と B との對立が、 A において止揚(否定)されてゐるのであつて、本質的なのは對立の統一なのである。一般的に言つて、「否定の否定」は對立の統一である限りにおいて、辯證法の法則たり得るのだと言へる。…最も重要な點は、 A を否定して B になるのではなくて、 A と B との對立を否定して A になることである。」(原光雄、「自然辯證法の研究」、二七頁)。「辯證法の眼目は「對立の統一」であつて他の法則は之の發現に外ならない。此の事からもつと根本的に考へると此の場合 A と B とは辯證法的な對立であつて A の存在は B の存在のための條件である。之が自乗によつて A に統一される、即ち A は B でもあるし($A \rightarrow B \rightarrow A$)でもある。此の矛盾した二つが A に統一されて居る。故に此の際形式論理學の「 A は A にして非 A に非ず」と云ふ同一律は成立

しない。即ち $A \rightarrow B \rightarrow A$ ($A \rightarrow B$) 數式の等號は何ら形式論理學の同一律を表はすものでなく、差別と同一の辯證法を反映するものなのである。」(武谷三男、「辯證法の諸問題」、昭和二十一年、四三頁)。

(2) 社會(歴史)における否定の否定の例證として、マルクスから次の二つのものを書き添へておかう。「措定——競争に先だつ封建的獨占。反措定——競争。綜合——近代的獨占。これは、それが競争制度を前提する限りに於ては封建的獨占の否定であり、それが獨占たる限りに於ては競争の否定である。かくて近代的獨占——ブルジョアの獨占——は、綜合的獨占であり、否定の否定であり、反對の結合である。」(マルクス、「哲學の貧困」、五八二頁)。「資本制生産方法から生じた資本制占有方法、隨つて資本制的私有は、生産者自身の勞働を基礎とする個人的私有に對する第一の否定である。が、資本制生産は、一の自然行程の必然性を以つて己れ自身の否定を造り出す。これ即ち、否定の否定である。この否定は私有を復興するものではないが、然し、資本制時代の獲得物たる協業や、並びに土地と勞働それ自身に依つて生産された生産手段との共有や、それらのものを基礎とする所の個人的所有を造り出すことは確かである。」(高島素之譯、マルクス、「資本論」、第一卷、第二冊、七五七頁)。

(3) 自然認識における否定の否定の發展過程は、エンゲルスによつて、「自然辯證法」への舊序説(一八八〇年)の中に明確に敘述されてゐる。「自然辯證法」、下卷、五一—三一頁、参照)。(一)自然を運動・變化の中にあるものと見た。「古代人の天才的な自然哲學的な直観」。(二)その止揚としての近世自然哲學。たゞし「自然の絶對的不可變性の見解」・古代人の自然觀の反對物・形而上學的な發展觀。(第一否

定)。「近世自然科學、それは、古代人の天才的な自然哲學的な直観、及びアラビア人の極めて重要な、だが統一のない従つて大部分が無結果に終つた・發見、と對立して、科學的、體系的な且つ全面的な發展を遂げたところの唯一の自然科學である。」(同上、五頁)。「この時代を特に特徴付けたものは、自然の絕對的不可變性の見解を核心とする一の特有なる世界觀の完成である。自然その者の成立がいかようであつたにせよ、一旦存在する以上、自然は夫が存續する限り夫がかつてあつたそのまゝに止どまるものであつた。」(同上、一〇頁)。「十八世紀前半の自然科學は知識の廣さにおいても、また素材の整理においてさへも、遙かにギリシャ古代に立ち勝つてゐたにも拘らず、その素材の理念的な處理、即ち一般的な自然觀においては遙かにギリシャ古代に劣つてゐた。」(同上、一一頁)。(三)カントの星雲説・地殼の漸次的形成を探究する地質學の發見(ライエル)・エネルギー變化の法則の發見・細胞の發見・進化論的生物學の形成(後者の三つはいはゆる自然科學上の「三大發見」(『フォイエルバッハ論』、九〇八頁、參照))等による形而上學的自然觀の否定・辯證法的自然觀の形成。(第二否定・否定の否定)。「吾々は、再び自然全體は、最小なるものから最大なるものに至る迄、砂粒から太陽に至る迄、原生生物から人類に至る迄、なべてみな永劫の・生成と消滅、絶えて止むことのない流れ、停止することのない運動と變化との裡にその存在を保つてゐるといふかのギリシャ哲學の偉大な創設者達の觀方に戻り着いた。たゞそれは次の様な本質的な差異、即ちギリシャ人に在つては天才的な直観であつたところのものが、吾々においては嚴密な、科學的な、經驗に即した研究の結果であり、それ故遙かに精密な且つ明瞭な形態において現はれてゐるといふ差異をも

つてゐるだけである。」(同上、一八一—一九頁)。「多量に集積される、純經驗的な發見を整理するといふ必要が、理論的自然科學に強要した革命は、最も頑強な經驗家にすら、自然現象の辯證法的な性質を意識せしめずにはおかない底のものである……。」(エンゲルス、『反デュリング論』、二〇四頁)。「現代物理學は産褥に就いてゐる。辯證法的唯物論を産みつゝあるのだ。」(レーニン、『唯物論と經驗批判論』、下卷、九六頁)。「——しかしてエンゲルスはかういつてゐる。「かくて近世自然科學は、物質の運動の不滅の原理を哲學から籍りて來なければならなかつた。即ちこの原則なしには近世自然科學は最早成立しえない。」(『自然辯證法』、下卷、二七頁)。「まさに……辯證法こそ、今日の自然科學にとつて最も正しい思惟形式なのである。なぜならば、辯證法のみが獨り自然の中に行はれる進化の諸過程に對して、總括的全體的な諸聯關に對して、一つの研究領域から他の夫れへの移り行きに對して、類推を、従つて説明方法を提供するからである。」(『反デュリング論』への舊序文——辯證法について)、『自然辯證法』、上卷、二〇七頁)。「辯證法のみが自然科學の理論的困難を救ひうる。」(同上、二〇九頁)。「理論的自然科學の書を手にする者は誰れでも、自然科學者がいかに甚しく……混亂と紛糾とに支配されてゐるか、また、今日國中に擴がつてゐる所謂哲學なるものが、いかに彼等自然科學者達に全然何一つの出口をも提供してゐないかといふことを、彼等自ら氣づいてゐるのだといふ印象を受けたいこととは殆んどないのである。かくして此處では、何らかの形式において、形而上學的思惟から辯證法的思惟へ復歸する以外、解決に到達すべき何等の出口も何等の可能性も他には存在してゐない。」(同上、二一〇頁)。「——なほエンゲルスは

自然科学者の哲學無視の傾向を次のやうに評してゐる。「自然科学者は、哲學を無視したり、罵つたりすることをもつて、自己を哲學から解放することができると信じてゐる。しかし自然科学者も思惟なしには先へ進めないし、思惟するためには思惟の諸規定を必要とする。ところが、彼等はいかに諸範疇を、古い過去の哲學の殘渣によつて支配せられてゐる所謂教養ある階級の日常意識からとか、あるひは學府においてお義理に聽講した哲學の端くれ（これらは單に端くれのなだけでなく、種々雑多な、概して劣悪極まる諸學派の人々の見解のごつちやませである）からとか、あるひは各種の哲學書の無批判的な無系統的な講義から、不用意に取つてくるのだから、彼等は哲學の奴隸となつてゐないどころでなく、大概は憐れにも、最悪のものに奴隸となつてゐるのである。そして哲學に對して最もひどく罵るものこそ、正に最悪の哲學の最悪な俗悪化せられた殘渣の奴隸たることを現はしてゐる。」（同上、上巻、一一五頁）。

(4) レーニンは『辯證法の問題に寄せて』の中で次のやうに書いてゐる。「哲學の『一圓』——人物に關する年代記は必要であるか？ 否！」。古代——デモクリトスからプラトンまで、そしてヘラクレイトスの辯證法まで。文藝復興期——デカルト對ガッサンディ（スピノザ？）。近代——ドルバック——ヘーゲル（パルクレイ、ヒューム、カントを経て）。ヘーゲル——フォイエルバッハ——マルクス。」（『哲學ノート』、第三冊、三二六頁）。「これ『哲學史』を部分的に、古代、文藝復興期、近代に區分して考究するときにもその各々に否定の法則が内在してゐる。」（永田廣志、『唯物史觀講話』、一一二頁）。「素材な唯物論から觀念論を経て辯證法的唯物論へ、——かくの如きが否定の否定の法則による哲學の發展史である。レーニ

ンも、古代、文藝復興期および近代の哲學史に關して發展の端初を素材な唯物論に取り、觀念論を経てヨリ高い唯物論をもつて發展の周期を終らせてゐる。特に近代に關して、「ドルバック——ヘーゲル（パークレイ、ヒューム、カントを経て）。ヘーゲル——フォイエルバッハ——マルクス」と記すとき、この思想は極めて明白である。ここでは、フランス唯物論が出發點であり、ドイツ觀念論を経てマルクスをもつて發展は一應終結する、といふことが表白されてゐる。」（永田廣志、『唯物辯證法講話』、一九五頁。なほレーニンは『哲學ノート』にかう書いてゐる。「哲學史と圓との比較——この圓は圓の一大集合を圓周としてゐる」「ヘーゲル」。非常に深刻で正しい比較!!! 思想の各ニュアンスは人間の思想一般の（螺旋）發展の大きな圓の上の一圓。」（第二冊、一七一頁）。——なほ注目すべきエンゲルスの言葉。「彼等哲學（デカルトよりヘーゲルへ、ホップスよりフォイエルバッハへ）を眞に押し進めたもの、それは特に力強く、不斷に奔進して止まぬ自然科学と産業の進歩であつた。」（『フォイエルバッハ論』、八九一頁）。

VII 辯證法的運動の過程・螺旋を描く過程は、第一否定と第二否定との統一・否定と否定の否定との統一である。こゝでは否定といふことが最大の役割を演ずる。この點から見れば、「否定の意義が、正當に解せられることが、……辯證法の理解の基である」ともいへる。こゝに否定とは、自己運動における否定・辯證法的否定・止揚・揚棄・アウフヘーベン（Aufheben）のことである。「辯證

法的否定を止揚と名づける。」「発展の契機としての否定は常に止揚の形式を取つてゐる。」「自己運動のあるところには、つねに辯證法的否定、即ち止揚が行はれる。」「止揚は、ヘーゲルの言葉をかゝるならば、「最も内的な且つ最も客観的な契機」である。」「止揚といふことと止揚されたもの……といふことは、哲學の最も重要な概念の一つ、いたるところでくりかへされる根本規定である。」

- (1) 三枝博音、『ヘーゲル・論理の科學』、二四一頁。
- (2) 永田廣志、『唯物辯證法講話』、一九一頁。イデオロギー部面における「批判的攝取」も止揚の一つの形態である。マルクス主義はドイツの古典哲學・イギリスの古典經濟學・フランスの社會主義——すなはち十九世紀初頭ヨーロッパの三大國で發達をとげてゐた三つの最重要なる思想潮流——の繼承・相續・批判的攝取・止揚により形成されたものである。(レーニン、『マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分』、參照)。「マルクス主義の哲學は、人類の全科學的認識および實踐の最大の概括である。」(ラリツェウイチ、『唯物論と經驗批判論』と『哲學ノート』、(永田廣志譯、コムアカデミア哲學研究所諸家、『唯物論と經驗批判論』研究、昭和十一年、四九頁)。「概括」も一つの止揚である。
- (3) 永田廣志、『唯物史觀講話』、一〇九頁。
- (4) 永田廣志、『唯物辯證法講話』、一九三頁。「否定の否定の法則は、止揚に止揚を重ねて低きより高きに進む發展の全體的過程を定式づけるものである。」(同上)。

- (5) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 497.
- (6) Hegel, ibid. I, S. 93-94.

○ 止揚とは否定して保存することである。止揚は否定とその反對物たる保存との統一である。辯證法的否定は單に否定に盡きるものではなくて、その反對物たる保存との統一・否定と保存との二重性である。ヘーゲルは、『精神現象學』の中で「止揚は……その眞實なる二重の意味を表示してゐる。止揚は否定であると同時に保存 (ein Negieren und ein Aufbewahren zugleich) である」と述べ、『大論理學』の中で「止揚 (Aufheben) といふ言葉は言葉からすれば二重の意味をもつてゐる。すなはち保存 (aufbewahren) 維持 (Erhalten) といふほどの意味と停止させる (aufhören lassen) 終結させる (ein Ende machen) といふほどの意味とをもつてゐる。保存するといふことそのことがすでに、或るものを維持するためにその或るものからその直接性をしたがつて外的諸影響にさらされた定在を除き去るといふ否定的なものを自分の中に含んでゐる。——かくして止揚されたものは、その直接性を失つてしまつてはゐるがそのために無に歸せしめられてゐるのではないところの同時に保存されたもの (ein zugleich Aufbewahrtes) である」と書いてゐる。このやうに止揚 (辯證法的否定) は否定と保存との對立物の統一であるが故に、止揚の結果は、「單なる無」(das reine Nichts) ではない。

くて、「規定された無」(ein bestimmtes Nichts)・新しい質・新しい矛盾・新しい對立物の統一・新しい段階(「ヨリ高度の段階」)・規定された否定(Bestimmte Negation)・「媒介されたもの」(ein Vermitteltes)である。ヘーゲルの言葉——「自己を止揚するものはこの止揚によつて無となるのではない。無は直接的なものであるが、これに反して止揚されたものは媒介されたものである。止揚されたものは非存在であるが、しかし存在から出てきたところの結果としての非存在である。それ故にそれはその出發點であるところの規定性をなほ自己に即してもつてゐるのである。」⁶⁾「結果がその眞の形においてすなはち規定された否定として把握せられる場合には、これによつて直ちに新しい形態が發生して……ゐるのである。」⁷⁾「辯證法はその結果として否定的なるものをもつてゐるが、しかしこの否定的なものほまさに結果として同時に肯定的なものである。何となればこの否定的なものは、それがそこから結果するところのものを自分の中へ止揚したものととしてふくんでをり、且つまたそれなくしては存在し得ないからである。」⁸⁾レーニンの言葉——「否定的なものは同様に肯定的である……(ヘーゲル)——否定は規定された或るものであり、規定された内容をもつてゐる。内的矛盾は、新らしい一層高度の内容による舊い内容の代位に導く。」⁹⁾——かくして止揚は「否定的なもの」と肯定的なものとの統一¹⁰⁾・「肯定的なもの」否定的なものにおける保存¹⁰⁾であるといふことができる。この

やうな否定の理解がすなはち「否定の辯證法的理解」である。

(1) 故に、止揚は同時に「一層高める進み行き」である。「揚棄の關係、すなはち否定するとともにまた保存し、しかも一層高める進み行き」云々。(松村一人、『ヘーゲル論理學研究』、四三頁)。

(2) Hegel, *Phänomenologie des Geists* s. 94.

(3) Hegel, *Wissenschaft der Logik*. I. S. 94. 又は Hegel, *System der Philosophie*. I. S. 229 参照。

(4) 運動の結果が無(絶對的な無)に歸するといふ見解も誤謬であるが、無(絶對的な無)からの發生を説く見解も誤謬である。「新しいものの發生は、無からの發生ではない。新しいものは舊いものから發生する。舊いものは無になるのではなく、他のものに、新しいものに轉化する。」(永田廣志、『唯物辯證法講話』、一九〇—一九一頁)。レーニンはかう書いてゐる。「自然および生命においては、「無への」「規定された無への」運動が存在する。ただ「無からの」運動は、恐らく存在しない。常に何物か、からだ」と。(『哲學ノート』、第一冊、九五頁)。ヘーゲルは「矛盾の結果は單なる無(Nichts)ではない」と述べてゐる。(Wissenschaft der Logik. II S. 51)。なほヘーゲル論理學のなかには次の言葉が見出される。「否定的なものと同様にまた肯定的なものである。いひなほせば、自己に矛盾するものはゼロのなかにすなはち抽象的な無のなかに自己を解消するのではなくて、本質的にはたゞ自己の特殊な内容の否定のなかに自己を解消するにすぎない、更にいひなほせば、このやうな否定は全部の否定ではなくて、自己を解消するところの或る規定的事態の否定したがつて規定された否定であり、それ故に成果のなかにはその成果がそこか

ら結果してきたところのものが本質的にふくまれてゐる、……成果すなはち否定は規定された否定であるから成果は内容をもつてゐる。」(Ibid. I. S. 35-36)「思辨的なもの或ひは肯定的＝理性的なもの(辯證法的なものは對立のなかにおける二つの規定の統一、すなはちそれら二つの規定の解消および移行のなかにふくまれてゐるところの肯定的なものを把握する。……辯證法は肯定的な成果をもつ。何となれば辯證法は一定の内容をもつてゐるからである。いひかへれば、辯證法の成果は眞には空虚且つ抽象的な無ではなくて、一定の規定の否定であつて、この一定の規定は、成果が直接的な無ではなくて成果であるといふまさにその理由によつて、成果のなかにふくまれてゐるからである。」(System der Philosophie. I. S. 195)。(5) 「すべてのものは媒介されてゐる＝媒介され、一に結合され、移行によつて結合されてゐる。……全世界の合法的聯結。」とレーニンを書いてゐる。(同上、第一冊、三九頁)。

(6) Hegel, Wissenschaft der Logik. I. S. 94. 「それはその先行する内容の全部を次の段階の規定に高め、その辯證法的進行によつて何ものも失はずまた何ものをも背後にのこさないばかりでなく、獲得した一切のものを携へてゆき、自己を自己のなかで豊かにし密にする。」(Hegel, ibid. II. S. 52)。

(7) Hegel, Phänomenologie des Geistes. S. 73.

(8) Hegel, System der Philosophie. I. S. 195.

(9) レーニン、同上、第一冊、三一頁。

(10) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二五二頁、「より一層の發展において否定されるところの、與へら

れた現象の肯定的内容は、單に自らその否定を準備するばかりでなく、或る意味ではそれは否定されたものの中に保存され、それを克服し改作して、より高度の段階におけるそのものゝ否定へと移りゆく。(同上、二五二頁)。

辯證法的否定は、「先行發展の積極的結果を新しい段階の上で保存する」ところの否定・「從前の發展によつて創造されたすべて肯定的なものの保存を伴ふ、以前の段階の否定」であるが故に、發展の諸段階を內的＝必然的に聯結する役割をはたす。辯證法的否定は、だから、「發展の契機としての否定」・「聯結の契機としての否定」である。¹⁾「否定は古いものと新しいものの聯關の契機であり、前者から後者への發展、轉化の契機である。」²⁾「辯證法的否定は、過程の發展における現象の聯關を表現するために規定せられた否定でなければならぬ。」³⁾ヘーゲルの言葉を引用するならば、「辯證法は、……內在的超出 (das immanente Hinausgehen) である。……一切の有限なものは自分自身を止揚するところのものである。それ故に辯證法的なものは、科學的進行の起動的魂を構成し、且つ、それによつてのみ內在的聯關と必然性 (immanenter Zusammenhang und Notwendigkeit) とが科學の内容に入りきたるところの原理である。有限なるものの眞實なる外的ならざる乗り超えは要するに辯證法的なものの中に横たはつてゐるのである。」⁴⁾ 辯證法的否定は、だから、決して新しきものへの聯結を

つくりださぬやうな否定、或るものをたゞそれだけとして終結せしめるやうな否定ではない。それは決して單なる否定・空虚な否定・抽象的な否定・ヤカラな否定・マルツキリの否定・完全な死滅に導く否定・絶對的否定ではない。このやうな否定観は、「否定の形而上學的理解」・「否定の機械論的理解」であつて、前に述べた「否定の辯證法的理解」とは原則的「根本的に對立するところのものである」⁷⁾。「辯證法的唯物論の見地からすれば、否定とは、機械論者や形而上學者がさう解釋するやうに、舊きもの全體の絶對的な廢棄を意味しない、先行の發展段階を否定することは、これを廢棄しながら、同時に、この段階によつて達せられた積極的なものおよび進歩的なものをすべて保存することである。だから否定とは過ぎ去つた發展との形而上學的な分離を意味しない」⁸⁾のである。レーニンは、「疑ひもなく、辯證法は否定の要素を、しかも最主要な要素として含んでゐるが、辯證法における特徴的なもの、本質的なものは、單なる否定でも、矢鱈な否定でも、懷疑的な否定でも、惑ひでも、疑惑でもなくて、肯定的なものを藏した、即ちあらゆる惑ひも、あらゆる折衷もない、聯結のモメント、發展のモメントとしての否定である」といひ、エンゲルスは、「辯證法に於ける否定とは決して單純に否と言ふことではない、或はある事物は存在せぬと言ひ若しくは任意にそれを破壊することではない。……更に否定の態様は第一には、過程の一般的な性質に依つて、第二にはその特殊な性質に依つて、

特定されてゐる。私は單に否定する許りでなく、また否定を再び止揚しなければならぬ。されば私は第一の否定を、第二の否定が可能であるか或は可能になるやうにしなければならぬ。……されば各種の事物は、否定の際に發展が生ずるやうに否定さるべき、各々獨自の方法を有つてゐる」¹⁰⁾と述べてゐる。

- (1) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二四八頁、二五二頁。
- (2) 「聯結こそは移行なのだ」(レーニン『哲學ノート』、第一冊、一八一頁)。「諸段階の内的關聯を強調するところの一定方向における發展——この點に否定の否定の核心がある。」(シロコフ、ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、四四六頁)。

(3) レーニン、同上、第一冊、二六七頁、參照。「内在的な否定は最も重要な聯關のモメントであつて、これによつてのみ必然の聯關が理解されるのである。」(松村一人、『ヘーゲル論理學研究』、七六頁)。

(4) 永田廣志、『唯物辯證法講話』、一九一頁。

(5) シロコフ、ヤンコフスキー編輯、同上、四四二頁。

(6) Hegel, System der Philosophie, I, S.196.

(7) 「形而上學的な否定は……新しきものゝ發生、發展の問題を説明し得ない」(シロコフ、ヤンコフスキー編輯、同上、四五二頁、參照)。——否定の形而上學的「機械論的理解(特にカウツキー)の特徴——

「一、質的な轉化並びに相互に否定し合ふ諸段階を包藏せざる連續的に發展する過程として理解されたと

ころの過程の發展に對する外的モメントとしての否定。二、絶對的否定、廢棄としての否定。」(同上、四四一—四四二頁)。否定の辯證法的理解の特徴——(一)否定は過程の矛盾の内在的發展の結果である。(二)否定は對立性の矛盾に充ちた統一における、モメントである。(三)否定は同時に先行的發展を否定する一階段である。(四)否定は先行の段階を己れのうちに「止揚」する。(五)否定は過程全體の各種の段階における矛盾に充ちた否定の關聯である。」(同上、四四五—四四六頁)。

(8) ソヴェト大百科版 『辯證法的唯物論』、二一九頁。「否定の中に舊きものの一定の側面が保存されることを、舊きものが以前に持つてゐた姿のままにさういふ質や意義のままに、新しき要素の中に機械的に移轉されるといふ風に解してはならない。かゝる見地は、實は否定を無に歸し、單なる「増減又は反覆としての」……量的な俗流進化論的發展觀に到達する。……否定とは、舊きもの……の積極的なモメントのみを改作して保存するところの、新しき質の發生を意味する。否定とは發展においてより高度の段階に移り行くことである。」(同上、二二〇頁)。

(9) レーニン、同上、第一冊、二六七頁。

(10) エンゲルス、『反デューリング論』、三一七—三一八頁。

否定・止揚は——したがつて第一否定も第二否定(否定の否定)も——それぞれの發展段階の内在する矛盾(對立物の統一および闘争)によつて起る。否定・止揚はこの矛盾の解決・相争ふ對立物の

綜合にほかならぬ¹⁾。それ故に矛盾そのものはその矛盾を内有する或るものを否定に導くもの・その或るものにおける否定性(Negativität)である。されば否定性こそは辯證法的運動の起動的契機であるといふことができる。實に否定性は「自己運動と生動性との内在的脈動」(die inwohnende Pulsation der Selbstbewegung und Lebendigkeit)であり、「自己運動の最も内的な源泉」(die innerste Quell der Selbstbewegung)・「辯證法的魂」(die dialektische Seele)である³⁾。

(1) 「發展とは、或るものが自らを否定して他のものになることであり、否定は發展における本質的契機である。對立物の抗争が發展の源泉となるのは、正にそれが否定を與へるが故である。或るものがその發展の結果否定されて他のものとなることは、對立物の統一としてのそのものなかに含まれてゐる否定的契機が肯定的契機を克服し、そのものの否定を完成することを意味する。」(永田廣志、『唯物史觀講話』、一〇八頁)。

(2) 「否定性は辯證法の本質的モメントである。」(松村一人、『ヘーゲル論理學の研究』、五九頁)。

(3) Hegel, Wissenschaft der Logik. II. S. 61 u. 496 參照。「否定性は自己運動と生動性との内在的脈動である。」(Ibid. II. S. 61)。「それ〔否定性〕は……一切の活動性や生命のおよび精神的自己運動の最も内的な源泉、すべての眞なるものをそれみづからにおいてもちすべての眞なるものがそれによつてのみ眞なるものであるやうな辯證法的魂である。」(Ibid. II. S. 496)。

Ⅶ 圓形を描く三つの發展段階・出發點への復歸を伴ふ三つの發展段階の外面的な形だけは、早くから多くの思想家たちによつて、認められてゐた。もちろんこの場合、三つの段階の内的必然的聯結・矛盾による轉化をもつてする聯結・否定（止揚）による聯結が正しく把握されてゐたのではない。ヨリ高度の基礎の上で出發點へ復歸する三つの繼續的段階を進む發展といふ思想は、早くは、古代の神祕主義的宗教哲學・新プラトン學派、たとへばプロクロス（*Proklos*, 412—485）に見られた。「彼（プロクロス）は一者より多者への開展及び多者の統一への復歸といふプロティノスの根本思想から出發して、一切の定在者の發展の三段階を想定した。即ち、止留（モネー）、發出（プロホドス）、復歸の努力（エピストロペー）である。だが、このやうな辯證法は全き神祕主義の衣につつまれた概念の辯證法でしかな」かつた。²⁾ 後世になつて、圓形を描く發展・出發點へたかへる發展を教へたのは、天才的な歴史哲學者ヴィコ（*Giovanni Battista Vico*, 1668-1744）であつた。「彼の體系における特長は彼が世界の初から人類を支配し來り、更に未來においても之を支配するものとして、三つの時代の法則を提出したことである。歴史には、神の時代、英雄の時代、人間の時代の三つの時代の交替がある。此の法則は如何なる國民の歴史においても常に同一の順序を以て繼起するものであつて、第三の時代にいたると更に第一の時代への復歸が發現すると見た」のである。³⁾

(1) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二五三頁、參照。

(2) 秋澤修二、『世界哲學史（西洋篇）』、一六一頁。

(3) 改造社版、『社會科學大辭典』、（社會思想社編）、昭和五年、九一頁。

Ⅷ 三つの發展段階が螺旋狀において繼起するところの發展過程の外的形式・否定の否定の辯證法的運動の描く發展過程の表面的形式は、辯證法的唯物論にあつても、ヘーゲルの術語法にならつて、¹⁾ 定立（*These*）・反定立（*Antithese*）・綜合（*Synthese*）——或ひはテーゼ・アンチテーゼ・ジュンテーゼ、或ひは簡單に正・反・合——といふ「三分法」・「三段法」・「ツリアーデ」（*Triade*）の形式に表現される。發展の第一段階は定立・テーゼ・正である。第二段階（第一段階の否定・第一段階の反對物）は反定立・アンチテーゼ・反である。第三段階は綜合・ジュンテーゼ・合である。この第三段階は、第一段階の反對物たる第二段階の更に反對物であるから、反の反（反定立の反對物）したがつて正（定立）への復歸——ヨリ高度の基礎の上に再興された第一段階・第二段階によつて媒介され豊富にされた第一段階——である。⁴⁾

(1) 「ヘーゲルは否定の否定の法則の……特徴を云ひ表はすために正、反、合の概念を用ひた。彼によれば

最初に或るものが定立され、それを正とするならば、その否定は反であり、否定の否定、即ち反の否定は正と反の綜合として、反の内容を自らのうちに止揚してゐると同時に、反の反としては正への復歸といふ側面をも具有する。『永田廣志、『唯物史觀講話』、一一〇頁。クーノー・フィッシャーはかう書いてゐる。』概念は規定される。概念の中にふくまれた矛盾は展開され、そして解決される。これがすなはち辯證法的方法の過程を表示する三つの契機である。第一の契機は概念の指定 (Bestimmung) である。第二の契機は矛盾 (反指定 Entgegensetzung) である。第三の契機は解決 (Auflösung) である。第一の契機は肯定 (Position) である。第二の契機は第一否定である。第三の契機は肯定がより高度の段階において再興されるところの第二否定である。發展は、かゝる三つの契機によつて、かゝる二つの否定によつて、否定の否定によつておこる。それ故にヘーゲルは辯證法の方法を絶対的否定性の方法 (die Methode der absoluten Negativität) と呼んだのである。彼は契機の三體性 (Dreieitigkeit) 或ひは契機の三重性 (Dreifaltigkeit) を (それらの契機が統一へ總括されてゐるが故に) 方法の「三分法」(Triplizität) と標記した。 (Kuno Fischer, Geschichte der neuern Philosophie. Hegel. I. S. 569)。

(2) 定立・反定立・綜合は、また「即自」(an sich)・「對自」(≡「向自」(für sich)・「即自且對自」(≡「即自對自」・「即自且向自」(an und für sich)といふ概念をもつていひあらはされる。即自とは、いまだ媒介をへずに直接的な状態にあること・未發展、未顯現、潜在的な状態にあることである。「ヘーゲルの Ansicht には、一つの事物、一つの過程、一つの概念に潜在してゐる。未發展的對立の原始的同一

性が存してゐる」。(エンゲルス、『反デューリング論』、二四四頁)。レーニンの言葉では、「即自的」≡「可能的なもの、未だ發展せざるもの、未だ展開せざるもの」である。(『哲學ノート』、第一冊、二六七頁)。

對自(向自)とは、この即自的のものが發展し顯現した状態・したがつて或るものが他者と區別されるにいたつた状態にあることである。「Fisich に於てはこの潜在した要素の區別及び分化が生じ、その争闘が始まる」。(エンゲルス、『反デューリング論』、二四四頁)。即自且對自(即自對自・即自且向自)は、即自と對自との統一の状態にあることである。「即自且向自的(an und für sich)も普通には「絶対的」の意味であるが、その中には先の「即自的」及び「向自的」の二概念の統一としての「絶対的」といふ事が含まれてゐる。即ちそれは「即自的」の状態が「向自的」の状態を経る事に依て再び自己に還り、……「それ自身」となつたものである」。(鈴木權三郎譯、『大論理學』、上卷 譯者註、六六三頁)。(「在自」(≡「自在」(bei sich)は即自且對自と同じ意味である。「ヘーゲルに於ては自在はまた先きの即自と對自との統一若くは眞理性すなはち即自且對自(an und für sich)と同義である」。(三枝博音、『ヘーゲル・論理の科學』、二五八頁)。

——なほヘーゲルは「方法」(Methode) 思辨的「辯證法的方法」(die spekulative Methode) 絶対的方法 (die absolute Methode) 絶対的認識の方法 (die Methode des absoluten Erkennens) 客觀的眞理の認識方法」の契機として次の三段階を説明してゐる。すなはち「發端」(der Anfang——第一のもの)・「進展」(der Fortgang——第二のもの)・第一のものの否定・第一否定)・「終結」(das Ende——第三のもの)・第二のものの否定・第二否定)。(Hegel, System

der Philosophie. I. S. 418-451, Wissenschaft der Logik. I. S. 487ff. 参照)。「方法の全形式は三分法 (Triplizität) である」(Hegel, Wissenschaft der Logik. II. S. 498)。(因みに、レーニンが『哲學ノート』に、「絶対的方法 (即ち客観的真理の認識方法)」と書いてゐる。(第一冊、二五五頁)。マルクスは『哲學の貧困』の中に、「ヘーゲル風の「辯證法的」スコラ哲學の無能と空虚とについてブルードンを批判し彼の「絶対的方法」の觀念論的性質と抽象性を暴露しつつ、次のやうに書いてゐる。(五四八頁)「……絶対的方法とは一體何であるか。運動の抽象である。運動の抽象とは何か。抽象的狀態に於ける運動である。抽象的狀態に於ける運動とは何か。運動の純論理的公式若くは純粹理性の運動である。純粹理性の運動とは何から成るのか、それ自らで立ち、それ自らで對立し、それ自らで組合ふことであり、測定、反指定、綜合として公式となることであり、更に或は、肯定し、否定し、否定を否定することである。）」——ヘーゲルが辯證法を「科學の方法と原則的に異なる哲學にのみ固有の方法」と考へたのは、當時の自然科學が自然の發展 (自然の辯證法) を知らなかつたこと・彼がもつばら人間社會の歴史からこれを論理的・思惟的過程に還元しながら辯證法を哲學の方法として形成したことに根ざしてゐるとはいへ、とにかく一つの「誤謬」である。辯證法は單に「哲學の方法」のみでなく、また「諸科學の方法」、それ故に「科學的認識の一般的方法」である。(松村一人、『ヘーゲル論理學の研究』、五七頁、参照)。

(3) 「ヘーゲルは三分法 (Triplizität) としても、四分法 (Quadruplizität) とも見ても、意味が正しく理解せられる限り、形式は何れと採られてもよいことを云つてゐる」(Wissenschaft der Logik. I. S. 497-498 参照)。……それは普通に、第一段の定立が單なる肯定的なものであり、第二段がその定立に對する否定であり、第三段が定立と反定立の對立の綜合であるといふ意味で三肢組織 (三分法) であるのに對して、第二段の否定を二つに分けるからである。つまり第二段の否定が、一つは第一段の定立に對立する否定と、他は否定として、否定のままに否定の否定となつて既に統一である場合、即ち對立が對立のままに一種の綜合として、第三の肯定的なものの消極面であるものとに分けられるのである。従つて第二の否定が、それ自身「否定の否定」として消極的肯定であるのに對して、普通に第三の綜合とせられるものが、積極的肯定とせられて、第四段となるからである。」(武市健人、『ヘーゲル論理學の世界』、上卷、一八〇—一八一頁)。

(4) 「否定の否定の法則は、機械論者からもメンシエヴィキ的觀念論者からも歪曲されてゐる。」(ソヴェト大百科版、『辯證法的唯物論』、二二五頁)。機械論者たち (たとへばブハーリン、サラビヤノフ等々) は、否定の否定の法則をヘーゲル流の三分法・三段法としてその外形のみをとらへたばかりではなく、またそれを均衡・均衡の攪亂・均衡の回復といふ、外的に獨立せる二つの力の機械的關係に還元した。「三段法そのものを彼等は均衡論から引き出す」のだ。(同上、二二五頁)。ブハーリンの言葉を引用するならば、「ヘーゲルは運動のかゝる性質に氣づいて、それを次のやうな仕方はいひあらはした。すなはち彼は根源的な均衡狀態を定立 (These) として、均衡の破壊を反定立 (Antithese) すなはち對立として、そして新しい基礎の上における均衡の回復を——綜合 (Synthesis) (矛盾を和解 (aussöhnen) させるところの綜合された狀態) として、いひあらはした。三つの部分から成る定式 (三分法) (die dreigliedrige Formel

〔„Triade“〕に合ふところの、一切の存在するものの運動の、かゝる性質を彼は辯證法的性質と呼んだのである。〕(Bucharin, Theorie des historischen Materialismus. S. 75-76)。この説明から分る注目すべき一項——すなはち、機械論者ブハーリンによれば、綜合・「均衡の回復」は對立の和解・矛盾の融和にすぎない。均衡論は對立の統一を對立の和解に還元する。ブハーリンの折衷主義がこゝにあらはれてゐる。機械論者サラビヤノフは綜合を定立の屬性と反定立の屬性との「結合」と見てゐるが、これもブハーリンと同様の「折衷主義的ジューンテーゼ觀」である。これから生ずる政治的結論はかうだ。「實際においては斯やうな「シンテーゼ」は舊きもの、枠内に止まることの必要の反動的な基礎づけ、舊きもの、潤色」である。(シロコフ、ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、四五五頁)。機械論者は反動的現状維持のイデオログだ。和解の辯證法・和合の辯證法は、眞の意味において「對立を合一せずして統一に達しないところの空虚な辯證法 (die leere Dialektik) (Hegel, Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie, II, S. 232)である。なほ、「メンシェウイキ的觀念論者たちは、否定の否定を、舊きものの断片の折衷的綜合、結合にすり換へた。〔たとへば〕辯證法的唯物論は、デボリーンに従へば、ヘーゲルの辯證法とフォイエルバッハの唯物論との綜合である。〕(ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二五八頁)。

しかしヘーゲルにおける正・反・合と辯證法的唯物論における正・反・合とはその意味内容が著しく異つてゐることを注意せねばならない。この相違は第一章で明かにしておいたところのヘーゲルの

觀念辯證法と辯證法的唯物論における矛盾の理解(矛盾による運動の理解)の相違からくる當然の結果である。ヘーゲルにあつては、(一)現實的には對立物の統一(したがつて同時並存的に相互闘争的聯關)を形成してゐる二つの契機(一方の項から出發し、(二)これのなかにこれの否定としての他方の項がふくまれてゐることを明かにしてこの他方の項に移り、(三)更にこの他方の項のなかにこれの否定としての最初の項がふくまれてゐること(この他方の項が最初の項と同一であること)を明かにして最初の項とこの他方の項との統一に綜合へ移るのであるが、このやうな第一・第二・第三の三つの段階がすなはちヘーゲルの正・反・合のツリアーデなのである。松村氏はかう述べてゐる。「對立の一項から出發して他の項との内在的聯關を見出し、次にこの他の項から最初に考察された項との聯關をさぐり、かくして對立の統一を把握するにいたる思惟過程は、定立、反定立、綜合という概念の自己運動となる」と。それ故に、ヘーゲルのツリアーデにあつては、正は現實の同時聯關的相互闘争的對立物の一項であり、反も同様にそのやうな對立物の一項であり、合はそのやうな對立物の綜合をあらはすのである。だからヘーゲルのツリアーデは、現實に實在する對立物の統一(現實の同じ一つの發展段階)の内容が人間意識に反映する場合の思惟の過程(論理的過程)のツリアーデ、したがつて現實の同じ一つの發展段階の枠内におけるツリアーデである。しかもヘーゲルでは第三段階は段階

的に異なる先行の二つの段階すなはち第一段階と第二段階との綜合統一であるから、第三段階は正と反との「合」（定立と反定立との「綜合」といふ考へ方にならざるを得ないのである。ところが辯證法的唯物論の正・反・合のツリアーデはこれと全く異り、一つの現實的發展段階の枠を越え、現實に實在する三つの發展段階を内在的に結合する聯關の形式であり、したがつて現實的＝實在的過程のツリアーデである。だから正はそれ自身特有の對立物の統一（二つの契機の矛盾對立）をふくむ現實の一つの發展段階であり、反も同様にそれ自身特有の對立物の統一（二つの契機の矛盾對立）をふくむ現實の一つの發展段階（たゞし正の段階の反對の段階）であり、合も同様にそれ自身特有の對立物の統一（二つの契機の矛盾對立）をふくむ現實の一つの發展段階（たゞし反の反對の段階・正の反對の反對の段階・ヨリ高度の基礎の上に再生産された正の段階）である。だからこの場合のツリアーデは螺旋内の一圓環を組立てゝるる三つの實在的發展段階の繼起的過程の實在的形式である。しかもこの場合には、第一段階が消滅して第二段階となり第二段階が消滅して第三段階となるのであるから第一階段と第二段階との綜合といふものもあり得ず、また第三段階は第二段階からその内在的矛盾の止揚によつて出てきたのであるから第三段階は第一階段と第二段階との統一＝綜合の成果といふやうなものでもない。故に第三段階はいはゆる「合」ではない。このやうな第三段階にいはゆる「合」といふ規

定づけをするのは誤りであるといはねばならぬ。だから正・反・合といふヘーゲル的概念は辯證法的唯物論における否定の否定の圓環的運動過程・三つの現實的段階の辯證法的繼起の過程を正しくいひあらはすものではない。だから「普通ヘーゲルの方法と考へられる肯定、否定、否定の否定、あるひは定立、反定立、綜合、あるひは即自、對自、即自對自の進行は、そのまゝ現實の進行に適用することのできないものである」といふことができよう。正・反・合といふ概念はヘーゲルの觀念辯證法の觀念論的性格・辯證法の觀念論によつて歪められた姿をあらはしてゐるのである。唯物辯證法はヘーゲルから正・反・合の術語を踏襲してゐるけれども、ヘーゲルの正・反・合と辯證法的唯物論の正・反・合とは甚だしくその意味が異つてゐるのである。

(1) 松村一人、『ヘーゲルからの前進と後退』、三〇頁。「すべての事物はそれを現在させる過程そのものうちに、その死滅への過程を含んでゐる。しかしこの否定の過程は單に古いものの解體の過程ではなくて、同時に新しいものの發生の過程でもある。このように、肯定のうちには否定を理解し、そして否定のうちには新しいものの肯定を理解することこそ、ヘーゲルのツリアーデの根本精神である。それは本來、順次に生じる三つの形態の關係ではなくて、ある一つの形態から新しい形態への轉化の内在的聯關を示すものである。」（松村一人、『ヘーゲル論理學の研究』、六三頁）。

(2) 松村一人、『ヘーゲル論理學研究』、九〇頁。

正・反・合のツリアーデ(三分法)は、否定の否定の運動・ヨリ高度の基礎において出發點へたちかへる三つの繼續的段階を進む發展の外的形式の表現・外形の把握である。それ故に三分法は客觀的に實在する發展過程の「要約」され「概括」された「一般的な辯證法的公式」・「圖式」である。ヘーゲルもこの三分法が運動過程の外的側面であることを主張する。「……方法の全形式が三分法であることは……全くたゞ認識の仕方の表面的且つ外的な側面にすぎない……」と。(これにレーニンは、『哲學ノート』の中でかう評註してゐる。「辯證法の「三分法」はその外的な表面的側面である」²⁾。そしてヘーゲルは、このことからして三分法は「全く外的な、内容の性質を規定しないところの、形式」と誤り考へられたとなし、當時の自然哲學的學派のやりかたに關して、「形式主義はなるほど三分法を同様にわがものとなし、三分法の空疎な圖式に固執した。現代哲學のいはゆる體系づけ (das Konstruieren) —— 概念ならびに内在的規定をもたぬかゝる形式的な圖式に常に粘着し外的秩序づけのためにこれを使用することにはかならずぬところの——の淺薄なる暴行と貧弱さとは、この三分法の形式を退屈なものたらしめ、評判の悪いものにしてしまつた」と述べ³⁾、「ヘーゲルは形式主義を厳しく罵倒し退屈で空虛な辯證法の遊戯を罵つた」⁴⁾。しかしながらヘーゲル自身も、實のところ彼の代表

する革命的ドイツ・ブルジョア階級の未成熟性||妥協性と當時の諸科學の低い發達水準とに制約されて觀念論にとらはれ論理的移行を客觀的に實在する世界の運動と(顛倒的に)思ひ誤つたが故に、世界の自己發展(精神の自己發展・論理的範疇の自己運動)を三分法の形式をもつて體系に構成する際に人爲的・恣意的結合をいたるところにおいて企て、ために、前述のごとくたゞさへ觀念論的に歪められてゐるところのヘーゲルの三分法は、一層著しく觀念論的に歪曲され客觀的世界に實在するまゝの螺旋形運動の過程・三段階的過程をますます反映しないものとなつてしまつてゐる。「ヘーゲルに従へば、精神の自己發展、各々の論理的範疇の自己發展は、「三段法」の形式で行はれる。ヘーゲルは純思想上の方向を進み、この三段階的圖式に従つて、概念の矛盾を克服し「止揚」したが、客觀的世界の實在的矛盾の眞の解決には達しなかつた。相互に「否定」し合ふ「三段法」の論理的段階は、ヘーゲルにあつては、人爲的な論理的移行と結び合つてゐて、現實的で物質的な、自然史的な、社會史的な聯結を反映しなかつた。」「ヘーゲルはこの論理的形式(正・反・合)を全能的のものと見做し、否定の否定がその下で行はれるところの現實的具體的な事情や條件の究明といふことに留意しなかつた。だから彼にあつては一切の發展は具體的事實からの遊離において、正・反・合の公式に無理矢理に押し込まれ、現實の歪曲が與へられた。」「ヘーゲルは三段法に神秘的な形式を着せ、そ

これを一の普遍的な圖式と化して、自然のあらゆる現象をこの圖式に押し込んだ。」すなはちヘーゲルにおいても、三分法は觀念論にわざはひされて形式主義的に取扱はれ、したがつてまた結びつかないものを無理に結びつける詭辯論と化したのである。⁸⁾ しかもヘーゲルにおける反動的契機——觀念論・體系の完結性は無限發展の三分法的過程を歪曲して螺線を窮極においては本來の圓形——起點と到達點とが同一次元内で合一するところの——に還元した。「ヘーゲル哲學においては世界とその認識の全分野は三分法の公式によつて構成され、しかも起點は終局において終點と完全に合一し、全體は閉合した圓を成して完結する。」⁹⁾ すなはち否定の否定の運動、正・反・合の運動は、ヘーゲルでは、「絶對的な完結」に終ることとなつたのである。

- (1) Hegel, Wissenschaft der Logik II. S. 498.
- (2) 『哲學ノート』、第一冊、二七三頁。
- (3) Hegel, Wissenschaft der Logik. II. S. 498.
- (4) レーニン『哲學ノート』、第一冊、二七五頁。
- (5) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二五四頁。
- (6) 永田廣志、『唯物史觀講話』、一一〇頁。
- (7) ソヴェト大百科版、『辯證法的唯物論』、二二三頁。

(8) 一具體的研究をまたないで、手當り次第に一切のものに三分法の公式を押しつけるのは詭辯論である。」(永田廣志、『唯物辯證法講話』、一九六頁)。

(9) 永田廣志、同上、一九六頁。

ツリアーデ(三分法)の形式主義的使用は誤謬である。三分法の圖式を客觀的世界に押しつけこの圖式の中に客觀的世界を曲げ込むことは觀念論的・形式主義的誤謬である。我々は客觀的現實の辯證法的運動の一般的概括における反映としての否定の否定の法則・客觀的世界の概括的要約としての一般的な辯證法的公式たる三分法を「研究の手引」として、客觀的世界に實在する個々の發展段階(個々の事物)の綿密なる全面的・具體的研究によつて、それぞれの發展段階に特有なる内的矛盾を捕捉し、一の段階の否定(止揚)による他の段階への移行(轉化)のそれぞれの特殊性を具體的に把握したがつて舊き段階に内的必然的に聯結する新しい段階を客觀的世界に在るがまゝにとらへ、客觀的に實在する三つの段階の聯結をその實在するとほりに意識に反映・模寫しなければならぬ。いひなほせば、三分法が客觀的世界において個々の場合に具體化してゐる現實の姿をありのまゝにつかまへねばならない。何となれば、現實は一般的なる三分法とその具體的變客との統一であるからである。「各種の過程に内在する否定の否定の法則は、外部から與へられる種々の條件に應じて、それ相

應の屈曲を蒙むる」²⁾からである。エンゲルスの言葉をかゝるならば「否定の態様は、第一には過程の一般的な性質に依つて、第二にはその特殊な性質に依つて、特定されてゐる」³⁾からである。實に「辯證法的發展は、……現實性そのもの、研究における最大の具體性の要求と常に繋がつてゐる」⁴⁾。「辯證法は……事物を即自且對自的(an und für sich)に考察することをめざしてゐる」⁵⁾ものなのである。かくのごときが三分法のマルクス主義の・辯證法的唯物論の立場における正しい取扱ひかたである。「ヘーゲル辯證法を唯物論的に改作したマルクスおよびエンゲルスは、否定の否定の法則をも神秘化された形式から解放した。……マルクスとエンゲルスとはこの法則を普遍的な抽象的圖式と化することと強く反對して、各個々の過程におけるこの法則の特殊な發現を力説してゐる」⁶⁾。

(1) 「具體的分析において方法として役立つものは一般法則である」。(永田廣志、「唯物史觀講話」、一一三頁)。「それ〔否定の否定の法則〕は……我々の認識の方法論的武器の一つである」。(シロコフ、ヤンコフスキ編輯、「唯物辯證法教科書」、四六二—四六三頁)。「それ〔三分法の公式によつて圖式的に説明される否定の否定の法則〕は何よりもまづ發展の法則である。大事なことはかういふ一般法則の適用が具體的研究に結びつかなければならぬといふことだ」。(永田廣志、「唯物辯證法講話」、一九六—一九七頁)。「重要なことは、一般法則を具體的研究に結びつけることだ。一般法則の指導的役割を無視するのは追隨的經驗論、

實證論であり、具體的分析を無視するのは「思辨的構成」であり、公式主義である」。(同上、一九九頁)。

(2) 永田廣志、「唯物辯證法講話」、一九八頁。「自然においては、歴史においても諸々の出來事の外見上の偶然を支配してゐると同じ辯證法的運動法則が無數の變化の錯綜の中を貫いてゐるといふことである。それはまた人間の思惟の發展史においても同様にこれを貫通する糸を成し、漸次に思惟する人間の意識に登つて來た法則である」。(エンゲルス、「自然辯證法」、下巻、二二二—二二三頁)。「一般に辯證法のすべての法則〔したがつて否定の否定の法則〕は、考察される過程が外的事情に攪亂される限りにおいて、決して純粹な姿では出現しない。それは現實世界においては變形され、歪められてゐて、決して觀念的に純化され、論理的に定式化された通りの姿で作用するものではない。だが現實世界の一切の運動には自己運動の契機が含まれてゐる以上、否定の否定の法則はあらゆる過程における内在的傾向として把握され得るし、また把握されなければならない」。「否定の否定の法則は……一切のものの發展の過程に内在する。しかし乍ら……物質の各種の運動形態には純粹の自己運動はなくあらゆるものはつねに一定の環境によつて圍繞され、その自己運動は一定の外的事情に大なり小なり影響される。すべての植物の種子や動物の卵は必ず自己運動としての正常な發展を、即ち發育を遂げるとは限らない。外的條件の如何によつて多くの種子は枯死し、卵は破壊されたり喰はれたりする。また反對に、外的事情は往々にして或るものの自己運動における繼起的段階の間隔の短縮、飛び越えを可能ならしめ、發展テムポを著しく促進することもあり得る。このことは發展を促進する外的條件が實踐的に造出され得る社會過程に關しては、就中、考慮されな

ければならない事實である。あれこれの發展段階を飛び越えることが可能なためには、そのための客觀的條件が必要である。かやうな飛び超えの可能性を吟味せずに、一定の必然的な發展段階をたゞ主觀的努力によつてのみ飛び超えやうと企てたり、他方ではつねに純粹な形式における否定の否定の法則から導き出された發展段階の公式をそのまま振り廻はしたりするのは觀念論的である。」(永田廣志、『唯物史觀講話』、一一〇—一一頁、一二二頁)。「外力の影響によつて、發展はその繼起的諸段階を飛び越えることが出来る。……しかし、かういふ飛び超えは、外部から與へられる一定の具體的な歴史的條件、外部からの曳き上げ作業をまつて初めて可能である。」しかしそのことは、トロツキーが考へるやうな、發展の繼起的段階の「論理的飛び超え」といふ意味のものではない。一定の段階を飛び越えることが可能か、それとも通過しなければならぬかといふことは、與へられた具體的な條件の如何に依存するのであつて、單に「論理的に」決定されるのではない。」なほ、「退歩、後退が行はれる際にも、「ヨリ高い段階でのくり返し」としての否定の否定は實現されない。この場合にも、一般法則は外力の攪亂作用によつて影響されてゐると云へるだらう。」(永田廣志、『唯物辯證法講話』、一九七—一九八頁、一九八頁、一九七頁)。

- (3) エンゲルス、『反デューリング論』三二七頁。
- (4) バムメリ、ミーチン其他、『ヘーゲルと辯證法的唯物論』、二〇二頁。
- (5) Hegel, System der Philosophie. I. S. 191.
- (6) ソヴェト大百科版、『辯證法的唯物論』、二二二—二二四頁。

個々の場合の具體的な研究と離れた三分法は、空虚なる公式にすぎず、「外蔽や殻の役割」以外には何の役割も果すことができない。三分法は、それだけとしては、否定の否定の辯證法的運動過程の單なる外形にすぎない。しばしば(ヘーゲルにおいてさへ然りしごとく)「否定の否定は圖式としての形而上學的ツリアーデにすり代へられる。……ツリアーデはこの場合、實際に、現實性の諸現象がそこに追ひ込められるところの外的圖式としてあらはれる。」このやうな三分法の取扱ひは、定立を否定に「機械的に對置」し反定立を綜合に同じく「機械的に對置」するものであり、發展の諸段階を「時間における絶對的障壁によつて切斷」するもの。「現實性の發展における聯關性の切斷」である。そして「ツリアーデへの現象の……圖式的嵌め込み」・否定の否定の内實の三分法の外的形式への還元が企てられる。かくのごときは形式主義—公式主義——三分法の形而上學的的理解である。これに三分法の唯物辯證法的理解が對立する。すなはちかうだ。「發展の過程においてアンチテーゼはテーゼのなかにあたへられてゐる、……同じことがシンテーゼに對しても云へる……さらに、シンテーゼは一つの循環の完了として他の循環もしくは新しき發展過程の出發點(テーゼ)となる限り、モメントとして新しきテーゼのなかに含まれてゐる。唯物辯證法は従つてテーゼ、アンチテーゼ及びシンテーゼを現實性の諸過程における矛盾の發展及び解決の形態及び段階として觀察する、……唯物辯證法は同

時に過程の発展における諸段階の相互関係を強調する。あらゆる段階はテーゼにしても、アンチテーゼもしくはシンテーゼにしても推進力たる矛盾の特別の形態として自らテーゼ及びアンチテーゼ（二つの同時聯關的『相互鬭争的契機』）に分れ、シンテーゼにおいて己れの發展を完了する。従つて否定の否定の全核心は、現實性の先行せる過程の矛盾の發展を経ての新しき合則性の發生の問題に歸着する。²⁾——以上が新しきものの發生の異なる取扱ひから生ずる、否定の否定の法則の二つの對立せる理解である。否定の否定の法則・三分法の機械論的『形而上學的理解は反動的支配者階級およびその陣營にひきいれられた小ブルジョア層のイデオロギーの一環・觀念論の一環を形成する。否定の否定の法則・三分法の辯證法的（唯物辯證法的）理解はプロレタリア階級の革命的イデオロギーの一環を形成する。革命的プロレタリアートの立場においては、否定の否定の法則の魂は三分法の單なる外的形式にあるのではない。それはヨリ高度の基礎の上に出發點へ復歸する三つの段階の內的『必然的・具體的聯關・新しきものと舊きものとの、否定』止揚による、したがつて螺旋的なる、內的聯關にあるのである。「否定の否定の法則の要點は三段法といふ外形にあるのではなく、發展を不可避的に急轉換へと向はせ、その「自己否定」を準備する、過程の內的特殊性の具體的な研究に、舊きものから生ずる新しきものの繼續的な發展段階の研究に、新しい、より高度の段階における舊きものの克

服と改作にあるのである。³⁾」

- (1) シロコフ、ヤンコフスキー編輯、『唯物辯證法教科書』、四四七頁。
- (2) 同上、四五二頁。
- (3) ミーチン監修、『辯證法的唯物論』、二五六頁。

15462

辯證法の根本法則



昭和二十三年九月五日 初版印刷
昭和二十三年九月十日 初版發行

定價百八十圓

著者 北川宗藏

刊行者 中西熊三郎

刊行所 東京都臺東區上野櫻木町三九
研進社

印刷者 平尾秀吉

東京都練馬區練馬南町一ノ三三

印刷所 新日本印刷株式會社

東京都練馬區練馬南町一ノ三五

(製本 昇榮社製本部)

研進社刊

東京都臺東區上野櫻木町三九

資本論 (全七分册)	宮川・マルクス著	法律に於ける階級闘争	平野義太郎著
經濟學批判 (全一卷)	宮川・マルクス著	戰後世界情勢の分析	堀江邑一著
經濟學史 (全六分册)	直井・ベルグ著	戰後經濟危機の發展過程	川崎巳三郎著
マルクス・エンゲルス傳	リヤザノフ著	政治犯罪の諸問題	風早八十二著
平和の條件	田中・カトリ著	經濟學入門	宮川實著
米國の民主政治	井伊・玄太郎著	主權概念を中心とする政治學說史	原田鋼著
永久平和 (対訳)	伊藤・カント著	近世哲學唯物辨證法	廣島定吉著
勞賃價格および利潤 (対訳)	宮川・マルクス著	高校生活論	大室貞一郎著
賃労働と資本 (対訳)	宮川・マルクス著	日本政治經濟の動向	日本經濟機構研究所著
獨文小論 理學	ヘーゲル著	農業理論の發展	河西太一郎著
獨文經濟學批判序説	カアル・マルクス著	知性的の恢復	大室貞一郎著
		政治的自由の理念	原田鋼著
		哲學概論	佐藤慶二著
		經營學批判	北川宗藏著

終

研進社版